ISSN 0387-284 X

読書科学

第50巻 第3・4号（通巻 第197・198号） 平成19年3月1日 発 行（季刊）

原著

英語における一人称・二人称の不十分な理解とその修正　岡田いずみ
麻柄啓一

「読者コミュニティ」の構築
—同人誌コミュニティについての語りの分析から—　石田喜美

派生語認知における語基の出現頻度と接辞の種類の効果　中山満子

交流ノートにおける「読者」から「作者」への移行
—水戸芸術館現代美術センター教育普及プログラム・高校生ウィーク2006「ちへい/cafe」における小学生の参加過程の分析—　石田喜美

197・198

日本読書学会

◇本　号　目　次◇

原著

英語における一人称・二人称の不十分な理解とその修正
早稲田大学大学院教育学研究科　岡　田　いずみ
早稲田大学　麻　柄　啓　一　83

「読者コミュニティ」の構築
—同人誌コミュニティについての語りの分析から—
筑波大学大学院人間総合科学研究科　石　田　喜　美　94

派生語認知における語基の出現頻度と接辞の種類の効果
奈良女子大学　中　山　満　子　105

交流ノートにおける「読者」から「作者」への移行
—水戸芸術館現代美術センター教育普及プログラム・
高校生ウィーク2006「ちへい/cafe」における小学生の
参加過程の分析—
筑波大学大学院人間総合科学研究科　石　田　喜　美　108

日本読書学会役員

会　　長（理事長）　有沢俊太郎
副 会 長（副理事長）　塚田　泰彦
常任理事　秋田喜代美　金子　守　桑原　隆　鳴島　甫　茂呂　雄二
理　　事　秋田喜代美　有沢俊太郎　池田　進一　岩永　正史　内田　伸子
甲斐雄一郎　金子　守　倉澤　栄吉　桑原　隆　向後　礼子
阪本　敬彦　島田　康行　高木　和子　玉岡賀津雄　塚田　泰彦
鳴島　甫　塙　和明　府川源一郎　福沢　周亮　増田　信一
湊　吉正　茂呂　雄二
監　　事　桐原　宏行　鄭　仁豪
常任編集委員　茂呂　雄二（編集委員長）　岩永　正史（副編集委員長）
秋田喜代美　内田　伸子　大河内祐子　大城　宜武　小川　雅子
甲斐雄一郎　上谷順三郎　向後　礼子　高木まさき　高橋　登
高橋　秀明　中條　和光　塚田　泰彦　寺井　正憲　荷方　邦夫
西谷　健次　塙　和明　村井万里子　山元　隆春　横山真貴子
編集協力　Terry Joyce（英文校閲）

The Science of Reading, Vol. 50, No.3・4 (2007)

英語における一人称・二人称の不十分な理解とその修正*

早稲田大学大学院教育学研究科　岡　田　いずみ**
早稲田大学　麻　柄　啓　一***

問題と目的

子どもたちは系統立てられた学習をする以前に，誤った認識や判断基準を持つことが知られている。これらは誤概念などと呼ばれ，学習を援助する側は，学習者が誤概念を持っていることを念頭におかなければならないことが指摘されてきた。自然科学領域においては，誤概念を修正する方法が多く提案されてきた(Hashweh, 1986；麻柄, 1990；進藤, 1995など)。また近年では社会科学領域(進藤・麻柄, 2000)や，文学作品の読み(立木・伏見, 2003)においても誤った認識が指摘され，その修正が試みられている。しかし，これまで英語に関する誤概念はほとんど扱われることがなかった。今井・野島(2003)は，外国語学習は概念変化(conceptual change)を必要とする学習であると述べている。日本語と英語では文法(文や語句の構成規則や使用規則)が大きく異なる。そのため，日本語の使用法としては正しいものであっても，その使用法を英語にそのまま適用できるとは限らない。それにもかかわらず，日本語の使い方を同じように英語に使おうとすれば，それは英語の学習に対して，干渉を及ぼす可能性がある。このような事態は学習者が系統立てられた学習以前に誤った認識を持っていることに等しく，この場合の日本語の知識は，機能的には英語学習における誤概念と同じであると見なすことができる。

外国語教育の分野では，学習者の誤りを母語からの干渉で説明する研究が以前から行われてきた。これらは対照分析と呼ばれている。これに対して，学習者の誤りにはそれ以外の原因によって生じるものの方が多くあることを示そうとする立場もあり，誤答分析という方法を用いて研究が行われてきた。しかし本研究は二つの立場のどちらが全体として妥当であるかを問題にするものではない。誤答分析の立場でも母語による干渉の誤答が排除されているわけではないこと(小篠・深沢・萬谷, 1983)を確認して論を進める。

教育心理学においても母語からの干渉を取り上げた研究が行われ始めており，例えば吉國(2005)は付加疑問文に対する応答の誤りを取り上げ，さらにその修正を試みている。そこでは「英語のきまり」だけを単独で提示するよりも「日本語のきまり」を併せて提示することが効果を持つ可能性が示唆された。英語と日本語の違いを明確にすることの重要性が示されていると言える。

本研究では英語の誤概念についての修正を試みる。具体的な内容としては，一人称と二人称の理解を取り上げる。英語を習い始める段階で学習者はまず，「私(は)＝I」「あなた(は)＝you」と教えられるのが一般的だろう。しかし，私たちは実際の会話では「あなたは～」という言い方を使うとは限らない。例えば，先生に対しては，「あなたは何歳ですか」ではなく，「先生は何歳ですか」と尋ねる方が自然である。子どもが親に話しかけるときにも「あなたは～」ではなく，「お父さんは～」「お母さんは～」となる。話し手が自分自身に言及するとき

* Insufficient comprehension of the English first person and second person concepts within Japanese students: Native language interference.

** OKADA, Izumi (Graduate school of education, Waseda University)
*** MAGARA, Keiichi (Waseda University)

も同様である。父親が子どもに向かって話すときには，「お父さんの言うことを聞きなさい」のように自分のことを「お父さん」と言うことが多い。このように日本語では，一人称代名詞（私）や二人称代名詞（あなた）を用いる代わりに「お父さん」「お母さん」「先生」のような親族名称や地位名称を用いることが多いのである。これに対して英語では，一人称にはIを，二人称にはyouを用いることが原則である。日本語と英語はこの点で異なっている。鈴木（1973）はこのような事態を鑑み，日本語では，「一人称代名詞，二人称代名詞」という名前ではなく，それとは区別される日本語独自の名称（自称詞，対称詞）の必要性を指摘した。自称詞，対称詞は，親族名称や地位名称などを含み，話し手が「自分」や「相手」に言及するときに用いる言葉という見地に立った名称である。

筆者らは6名の中学生（2年生3名，3年生3名）を対象に予備調査を行った。簡単な絵と吹き出しを用いて会話場面を表現し，会話文の英訳が正しいかどうかの判断を求めた。たとえば，「お父さん嫌いだ」（父に対する子の発言）に対して，“I don't like you.”や“I don't like my father.”などの文を提示し，それぞれの英文があっているかそれとも不自然かを問うた。その結果，“I don't like you.”を「正しい」とした者が4名（67％）いた一方で，“I don't like my father.”という文を誤って「正しい」と判断したものが5名（83％）に達した。同様に「太郎は親切ね」（太郎に対する母の発言）に対して“You are kind.”や“Taro is kind.”などの文を提示して質問したところ，“You are kind.”を「正しい」とした者が4名（67％）いた一方で，“Taro is kind.”という文を誤って「正しい」と判断した者が6名（100％）に達した。このような誤りは，日本語の使い方と同じように英語を使おうとすることから生じるものであり，日本語からの干渉と位置づけることができる。ただし，予備調査の対象者は6名と少なかった。本研究では，予備調査で見られた傾向がどの程度一般的なものであるかを明らかにすることを第一の目的としている。

第二に，そのような傾向が確認されたとして，その原因の一つを英語の学習方法の中に探ってみたい。それは英文の単語一つ一つを，対応する日本語の単語に置き換えて理解していくという学習方法である。本研究ではこれを「逐語的置き換え方略」と名づける。この方略では外国語学習が概念変化を必要とする学習であることが見えにくくなり，両言語の構造が異なる場合には問題を引き起こす可能性があると考えられる。この考えを裏付けるものとして小山（2004）の結果が興味深い。小山（2004）は「私の給料は安い」という日本文を英語にする際に，“My salary is cheap.”（正解はlow）のような意味エラーを引き起こす原因を語彙学習方略に求めた。その結果，英単語を学習する際に日本語の訳語だけを暗記するという対連合方略の使用程度が高いほどエラーを犯しやすいことが示された。ここに見られるように，日本語の単語と英語の単語を一対一対応させて学習する方略は，両言語の使用法や意味が対応しない場合には誤った英文を生み出す可能性が考えられる。本研究の内容に即して言うと，逐語的置き換え方略を用いる度合いが強いほど，「先生は何歳ですか」に対して“How old is my teacher?”でもよいと考えてしまう可能性が考えられる。

そこで本研究では，学習者の「逐語的置き換え方略」の程度をあわせて把握する。ただしこの場合，提示される状況によってこの方略の出現頻度は異なる可能性が考えられる。学習者はテストの場合には減点されないようにするため，全ての単語を一つ一つ日本語に訳す必要があると考えるかもしれないが，テストではない場合には単語一つ一つを訳すよりも，自然な日本語に近づけようとするかもしれない。この点を考慮し，本研究ではテスト状況と非テスト状況の両方を設定し，後者の状況として英語の本を翻訳するという状況を用いることにする。今回の被験者（中学生）にとって本の翻訳経験はないであろうが，翻訳小説を読んでいる可能性はあるので，テスト状況とは異なり，自然な日本語への配慮が生じる可能性を考慮したことによる。また提示する英文は会話文と非会話文の両方を用いた。これは会話文を訳す際に

は，普段の会話が参考となって逐語的置き換え方略の使用が制限される可能性を考慮したことによる。

本研究の第三の目的は，予備調査の傾向が確認された場合に，学習者の不十分な理解を修正することである。すなわち日本語と英語では「話者」と「相手」の表現の仕方に異なる点があることを把握させ，それに基づいて英語での正しい表現方法を理解させることである。

以上のように本研究は，日本語と英語の違いを人称代名詞の使い方に焦点を当てて問題にするものである。本研究によって，外国語を学ぶ際には母語と異なる使用法を用いる必要があることを示すことができる可能性がある。これは，母語を相対的にとらえ，母語を見直すきっかけになるという点で，英語教育に対してだけではなく，広く言語教育に関わる問題として位置づくものである。

方　法

1．対象と実施時期

公立中学校の3年生4クラス120名を対象に2005年11月に実施した。

2．実験の概要

実験は第1セッションと第2セッションからなる。セッションの間は2～3日あけられた。第1セッションでは逐語的置き換え方略の測定のための問題と，事前テスト問題が載った小冊子(B4判2枚)を配付した。1枚目は逐語的置き換え方略を測定する問題であり，2枚目は事前テスト問題であった。1枚目の逐語的置き換え方略を測定する問題によって，学習者を2群に分けた。テスト場面で日本語訳の善し悪しを判断する群を「テスト状況群」，小説の翻訳場面でそれを行う設定の群を「翻訳状況群」と名づける。小冊子を各クラス内でほぼ同数になるようにランダムに配付することで2群を構成した。テスト状況群は61名，翻訳状況群は59名となった。冊子には氏名の記入を求めた。

第2セッションでは，読み物と問題が載った小冊子(B4判2枚)を配付した。1枚目は一人称・二人称に関する読み物であり，2枚目は事後テスト問題であった。教師が読み物をゆっくり音読し，生徒はそれに合わせて黙読した。その後，2枚目の事後テストを一斉に行った。

3．第1セッションの内容

1枚目 逐語的置き換え方略を測定する問題　冊子1枚目には問題1と問題2が用意された(FIGURE 1，FIGURE 2参照)。いずれの問題でも，テスト状況群に対しては「英語のテスト」という状況が，翻訳状況群に対しては「アメリカの小説を翻訳する」という状況が教示文で示された。

問題1は非会話文であった。一つの英文に対して二つの日本文が提示された。そのうちの一つは単語を一つずつ日本語に置き換えた訳文(以下「直訳文」とする)であり，もう一つは自然な日本語にするために不必要と考えられる部分を削除した訳(以下「意訳文」とする)であった。被験者にはそれぞれに対して「よい」「わるい」「大体はいいけれど正確ではない」の判断を求めた[1)]。

問題2では英語での会話文に対して三つの日本語訳が

【テスト状況群への教示】英語の期末テストで英文を日本語に直す問題が出たとします。日本語の訳として「よい」と思うものには○を，「わるい」と思うものには×を，「大体はいいけれど正確ではない」と思うものには△をつけてください。(同じ記号を2回使ってもかまいません)

【翻訳状況群への教示】下の英文はアメリカの小説に出てくる文だと考えてください。あなたは，このアメリカの小説を翻訳するとします。日本語の訳として～(以下，同上)

1. These are my dogs.
   これらは私の犬たちです。(　)
   これらは私の犬です。(　)

2. When Betty was seven, her father changed his job.
   ベティが7歳のとき，彼女の父親は彼の仕事を変えた。(　)
   ベティが7歳のとき，父親は仕事を変えた。(　)

3. A tree fell on me near the park.
   公園の近くで，1本の木が私の上に倒れてきた。(　)
   公園の近くで，木が私に倒れてきた。(　)

4. A man stepped on my foot in the bus.
   バスの中で，1人の男の人が私の足の上を踏んだ。(　)
   バスの中で，男の人が私の足を踏んだ。(　)

5. Please tell me the way to the station.
   どうぞ，駅への道を教えてください。(　)
   駅への道を教えてください。(　)

注．いくつかの単語の日本語訳が注として添えられていた

FIGURE 1　問題1(逐語的置き換え方略を測定する問題)

【テスト状況群への教示】"Did you see Taro?" "Yes, I saw him in the garden." という会話文があります。テストに2番目の文(答えの文)を日本語に直しなさいという問題が出ました。3人は次のように考えました。あなたはだれの答えが一番よいと思いますか。

【翻訳状況群への教示】アメリカの小説の中に、"Did you see Taro?" "Yes, I saw him in the garden." という会話文がでてきました。3人は2番目の文(答えの文)を次のように翻訳しました。あなたは誰の訳が一番よいと思いますか。

①A君は単語の意味を1つずつ日本語にきちんと置きかえた。

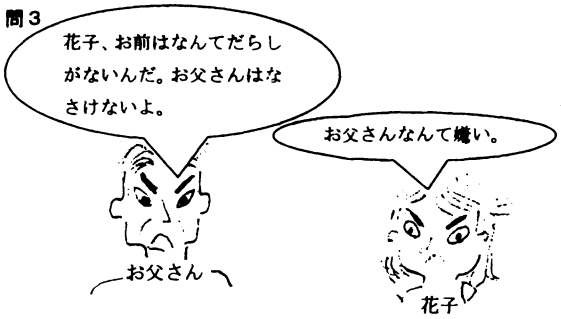
"Yes, I saw him in the garden."
↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓
はい 私は 見た 彼を 中で その 庭

A君の答え「はい、私は彼をその庭の中で見ました」

②B君は「in」と「the」は日本語にしなくてもよいと考えた。
B君の答え「はい、私は彼を庭で見ました」

③C君は「I」と「him」も日本語にしなくてもよいと考えた。
C君の答え「うん、庭で見たよ」

FIGURE 2 問題2(逐語的置き換え方略を測定する問題)



花子の発言を英語に訳します。
自然な英文には○を不自然な英文には×をつけてください(アイウすべて)。
ア. "I don't like me." ( )
イ. "I don't like my father." ( )
ウ. "I don't like you." ( )

FIGURE 3 事前・事後テスト問題の例(問題3)

示されており，テスト状況群に対しては「誰の答えが一番よいと思うか」，翻訳状況群に対しては「誰の訳が一番よいと思うか」選ぶことを求めた。三つの日本語の訳文は，①すべての単語を日本語に置き換えた文(A君)，②冠詞と前置詞を除く単語を日本語に置き換えた文(B君)，③さらに意訳した文(C君)の三つであった。

2枚目 事前テスト問題 問題3として出題された。会話場面での英語の人称代名詞の理解を把握する問題であった。人称(一人称・二人称)と格(主格・所有格・目的格)の組み合わせにより6問作成された(TABLE 1参照)。問題は文字のみではなく，FIGURE 3に例示したように2人の顔の絵と吹き出しを用いて会話をしている様子が表現された。また会話の話題になっている人物が会話をしている当事者(自分あるいは相手)であることがわかるように配慮された。例えば問1では，「先生は何歳ですか？」に対して「オレかい？ オレは40歳だよ」となっていた。

教示は，「2人の人が会話をしている場面です。会話に対する英文が三つ書いてあります。ア～ウについて自然な英文には○を，不自然な英文には×をつけてください(○や×の数は一つとは限りません)」であった[2]。各問に対して以下の三つの英文が用意された。それらは「(i) 人称代名詞を用いた正しい英文」「(ii) 日本語の単語に対応する英単語を用いた不自然な英文」「(iii) 明らかに間違った英文」の三つであった(TABLE 1参照)。以下では (i) を正文，(ii) を標的文，(iii) をダミー文と名づける。三つの英文は問ごとにランダムに提示されたが，その際，正文よりも標的文が先に与えられた。

4. 第2セッションの内容

1枚目 読み物 概略をFIGURE 4に示す。内容は以下の通りであった。①日本語では自分のことを「お父さんは～」のように言うところも，英語では話し手を表す単語がIなので全てIになる。②日本語では相手に向かって「お父さんは～」「お兄ちゃんは～」「そこの坊やは～」と言うが，英語では相手を表す単語がyouなので，先の表現を英語に直すと全部youになる。③最後にまとめとして，「話し手＝I」「話す相手＝you」という英語のきまりが提示された。

解説文の後に二つの質問がなされた(FIGURE 4参照)。一つは読み物の理解度を尋ねる質問であり，二つめは興味度を尋ねる質問であった。いずれも4件法で回答を求めた。

TABLE 1　事前・事後テスト問題での正答率

問題	事前 120名	事前→事後 110名
1．先生は何歳ですか？（注．先生への質問）		
（正）How old are you?	91	92→97
（標）How old is my teacher?	73	75→83
（ダ）Teacher is old?	86	86→91
2．お前はお母さんのこと好き？（注．子どもへの質問）		
（正）Do you like me?	88	88→95
（標）Do you like your mother?	58	57→79
（ダ）Do like you?	94	95→90
3．お父さんなんて嫌い。（注．父に対して）		
（正）I don't like you.	87	86→93
（標）I don't like my father.	38	37→75
（ダ）I don't like me.	91	92→89
4．お姉ちゃんもこの歌が好きだよ。（注．妹への返事）		
（正）I like this song, too.	87	87→89
（標）Your sister likes this song, too.	83	83→86
（ダ）This song like, too.	45	45→61
5．おまえ，お兄ちゃんの日記読んだか？（注．妹への質問）		
（正）Did you read my diary?	93	93→86
（標）Did you read your brother's diary?	67	65→78
（ダ）Did I diary?	90	90→83
6．僕は，昨日，お父さんのカメラをこわしちゃいました。（注．父に対して）		
（正）I broke your camera yesterday.	73	72→82
（標）I broke my father's camera yesterday.	40	40→73
（ダ）I broke yesterday.	90	87→87

注　・（正）は正文，（標）は標的文，（ダ）はダミー文を表す。
　　・いくつかの単語の日本語訳が注として記されていた。

2枚目 事後テスト問題　問題は事前テストと同一であった。なお，このページの冒頭には「前のページには戻らないでください。前にやってもらった問題ですが，もう一度お答えください」という注意が記されていた。

結果と考察

1．分析対象者

第1セッションを受けた人数は120名であり，第2セッションを受けた人数は110名であった。したがって，事前テストに関する分析は120名を対象に，事前・事後テストの両方に関わる分析には110名を対象に行うこととする。

2．事前テストでの正答率

正文では○，標的文では×，ダミー文では×をつけている場合に正答とした。各問の正文，標的文，ダミー文の正答者率をTABLE 1に示す。正文6問の平均正答率は87％であり，かなり高い値であった。正しい文を「正しい」と判断することは十分に可能であることが示された。ダミー文6問の平均正答率は83％であった。これもかなり高い値であり，学習者は明らかに間違った文を間違いだと判断することも容易であることが示された。これに対して，標的文6問の平均正答率は60％に留まった。日本語をそのまま英語の単語で置き換えてい

英語のIやyouはどういう意味でしょう。こう質問されると，I＝私（は），you＝あなた（は），と答える人が多いでしょう。これは間違いではないのですが，実は，英語のIやyouは，いつも日本語の「私（は）」「あなた（は）」と一致するとは限らないのです。

たとえば，お母さんが息子に自分のことを言うときに，日本語では，「お母さんは，この本が好きだよ」と言いますね。これを英語に直すとします。"Mother likes this book."や"Your mother likes this book."は不自然な英語なのです。この場合，お母さんは自分のことを言っているわけだから，I（私は）を使って，"I like this book."とするのが正しいのです。英語のIは「話し手」（つまりは「自分」）を表すのです。

女の子が自分のことを言うのに，「アヤはこのCDがほしい」のように，自分の名前（アヤ）を使っていうことがあります。これを英語に直して，"Aya wants this CD."とすると，アヤさんの意図が伝わりません。この英文を聞いた人は，話し手のアヤさんとは別のアヤ（という名の女の子）がこのCDをほしがっていると考える方が自然なのです。アヤは話し手なのですから，この場合もI（私は）を使わなくてはならないのです。ですから，"I want this CD."が正しいのです。

今度は「話す相手」の表し方を考えてみましょう。「あなたは，これが好き？」と聞くこともありますが，日本語では，相手に合わせてさまざまな言い方をします。たとえば，「お父さんは，これが好き？」「お兄ちゃんは，これが好き？」「そこの坊やは，これが好き？」。これらの文を英語に直すときは，father（父），brother（兄），boy（坊や）という単語は使えません。「お父さんは～」「お兄ちゃんは～」「坊やは～」のところは全部youを使います。英語では「話す相手」を表す単語がyouだからです。ですから，上の3つの日本文を英語に直すと全部，"Do you like this ?"になります。日本語と英語にはこのような違いがあるのです。

これまでの話をまとめてみましょう。日本語では，「話し手」である自分を表すのに，「私は～」だけではなく，「お母さんは～」，「アヤは～」（自分の名前）などいろんな言い方ができます。しかし英語に直すとこれらは全部Iです。日本語では「相手」を表す場合も，「あなたは～」だけではなく「お父さんは～」「お兄ちゃんは～」「坊やは～」などいろんな言い方ができます。しかし英語に直すとこれらは全部youです。

英語のきまり［話し手＝I　　話す相手＝you］

質問1　あなたは以上の説明がどのくらいわかりましたか。/ア．ぜんぜん分からなかった　イ．あまりよく分からなかった　ウ．だいたい分かった　エ．とてもよく分かった

質問2　日本語では「私は～」「お母さんは～」「アヤは～」といろんな表現ができるのに，英語では全部「I～」になるのをどう思いましたか。/ア．英語と日本語に違いがあることが面白いと思った　イ．英語と日本語に違いがあることがめんどうだと思った　ウ．別に何とも思わなかった　エ．知っていた

FIGURE 4　読み物

る誤った文までも「正しい」と判断してしまう者が多かった。日本語からの干渉によって英語の一人称と二人称の理解が不十分であることが示されたといえよう。その中でも特に正答率が低かったのは問2（58％），問3（38％），問6（40％）であった。

3．逐語的置き換え方略

逐語的置き換え方略を測る指標として三つの指標を用いることとする。まず，問題1において，直訳文に○をつけた場合を2点，△を1点，×を0点と得点化し，5問の合計点を算出した。以下，これを「直訳得点」とする。また，意訳の文に○をつけた場合を2点，△を1点，×を0点と得点化し，5問の合計点を算出した。以下，これを「意訳得点」とする。さらに，問題2においては，A君，B君，C君のいずれを選択するかによって置き換え方略の強弱を測定した。A君を選択した人を「置き換え方略強群」，B君を選択した人を「置き換え方略中群」，C君を選択した人を「置き換え方略弱群」とした。

テスト状況群と翻訳状況群における逐語的置き換え方略の強さを比較する。まず，直訳得点の平均値については，テスト状況群が6.1（SD=2.2），翻訳状況群が6.0（SD=2.1）であり，両群の直訳得点に差は認められなかった。意訳得点の平均値については，テスト状況群が7.3（SD=2.0），翻訳状況群が7.3（SD=2.2）であり，両群の意訳得点にも差は認められなかった。

問題2における置き換え方略強・中・弱群の人数の割合をTABLE 2に示す。χ^2検定の結果，2群間の比率の差は有意傾向であった（χ^2=5.67, df=2, p<.10）。残差分析を行ったところ，置き換え方略中群はテスト状況群に多く（調整された残差 2.28, p<.05），翻訳状況群には少ない（調整された残差 −2.28, p<.05）のに対して，弱群は翻訳状況群に多く（調整された残差 1.65, p<.10）テスト状況群では少ない傾向（調整された残差 −1.65, p<.10）が見られた。すなわち，テスト状況では置き換え方略の使用がやや強く，翻訳状況では意訳する人が多いことが示された。ただし，残差分析では有意ではないものの，翻訳状況群では強群の人数も21名（36％）と少なくない。この点に関しては，翻訳状況だから自然な日本語に訳さなければならないと考える者がいる一方で，翻訳状況だからこそ正確に訳さなければならないと考える者がいる可能性が考えられる。

TABLE 2　テスト状況群と翻訳状況群における置き換え方略強・中・弱群の人数（問題2）

	テスト状況群（61名）	翻訳状況群（58名*）
置き換え方略強群	16 (26)	21 (36)
同　中群	39 (64)	25 (43)
同　弱群	6 (10)	12 (21)

注・数字は人数をカッコ内はパーセンテージを示す。
・翻訳状況群で無記入者が1名いた（*）

テスト状況群と翻訳状況群で，直訳得点と意訳得点には差が認められなかったのに，置き換え方略強・中・弱群の割合に差が認められた原因に関しては以下の二つの可能性が考えられる。一つは，解答形式に関するものである。問題1は択一的な解答形式ではなかったので，また，直訳文も意訳文も意味的には正しいので，訳文の細かな違いを吟味するよりとりあえずは両方に○をつけるという（安易な）解答を排除できなかったのに対して，問題2では択一式の判断を求めたため訳文の細かな違いを吟味せざるを得なくなった結果，テスト状況群は厳密さという基準を重視し，翻訳状況群は日本語らしさという基準を重視した可能性である。第二の可能性は，問題2は会話文の訳であったため，翻訳状況群では発話として自然かどうかの検討が行われやすかったのに対して，テスト状況群では文の種類が影響を持たず，厳密さの基準が働いた可能性である。

4．逐語的置き換え方略と事前テストの関連

事前テストの正文，ダミー文，標的文の正答に各1点を与え得点化した。問題は各6問だったので，得点の範囲はそれぞれ0～6点である。直訳得点を指標とした場合，事前テストの得点との相関係数は正文と.013，ダミー文と.105，標的文と−.030であった。また，意訳得点を指標として，同様に相関係数を算出したところ，正文と.260（p<.01），ダミー文と.127，標的文と.261（p<.01）

であった。すなわち，逐語的置き換え方略が弱い（意訳が多い）ほど，正文でも標的文でも正答数が多かった。ただし，正文での正答数と標的文での正答数の間に相関が見られた（r=.380）ことを考慮して，正文での正答数を制御変数として，意訳得点と標的文の正答数の偏相関を求めた。その結果 r=.18（p<.10）であり，有意傾向であった。逐語的置き換え方略が弱いほど標的文での正答数が多い傾向にあるといえよう。

置き換え方略強・中・弱群を指標とした場合の各群における正文の平均点を算出した。その結果を TABLE 3 に示す。置き換え方略（3群）を独立変数，正文の平均点を従属変数とする一要因の分散分析を全被験者，テスト状況群，翻訳状況群を対象に行ったところ，いずれにおいても3群の差は有意ではなかった。同様に，置き換え方略強・中・弱群を指標とした場合の各群における標的文の平均点を TABLE 4 に示す。置き換え方略（3群）を独立変数，標的文の平均点を従属変数とする一要因の分散分析を行った結果，全被験者（F=5.43, df=2/116, p<.01）と翻訳状況群（F=4.07, df=2/55, p<.05）において3群の差は有意であった。Fisher の PLSD による多重比較を行った結果，全被験者では置き換え方略弱群の平均点は中群や強群よりも高かった（いずれも p<.01）。また翻訳状況群においても置き換え方略弱群の平均点は中群（p<.01）や強群（p<.05）より高かった。テスト群での差は有意ではなかったが，弱群の人数が6名と少ないことが影響している可能性が考えられる。ここでも逐語的置き換え方略が弱いほど標的文での正答が多いことが示された。注目すべきは，置き換え方略強・中・低群で正文の正答数には差がないが，標的文の正答数に差が生じた点である。この結果は，逐語的置き換え方略が弱い者が一般的な英語の学力が高いのではないことを示している。すなわち，正文を正しいと判断するような一般的な学力には差がないにもかかわらず，逐語的置き換え方略が強い者に標的文の正答が少なかったのは，逐語的置き換え方略が強いほど，日本語の単語をそのまま英語に置き換えようとするので，標的文での誤りが多くなることを示唆しているといえよう。

TABLE 3　事前テスト問題における「正文」の平均点

	全被験者	テスト状況群	翻訳状況群
置き換え方略強群	5.1 (85)	5.0 (83)	5.2 (87)
同　中群	5.1 (85)	5.2 (87)	5.0 (83)
同　弱群	5.7 (95)	5.5 (92)	5.8 (97)

注．カッコ内は正答率を示す。

TABLE 4　事前テスト問題における「標的文」の平均点

	全被験者	テスト状況群	翻訳状況群
置き換え方略強群	3.5 (58)	3.7 (62)	3.3 (55)
同　中群	3.3 (55)	3.5 (58)	3.1 (52)
同　弱群	4.9 (82)	4.8 (80)	4.9 (82)

注．カッコ内は正答率を示す。

5．読み物の理解と日英語の違いへの興味

読み物の理解度についての回答は，「とてもよく分かった」36人（33％），「だいたい分かった」50人（46％），「あまりよく分からなかった」18人（17％），「ぜんぜん分からなかった」4人（4％）であった（無記入者2名）。「とてもよく分かった」と「だいたい分かった」を合計すると約80％に達する。読み物の内容はほぼ理解されたと言えるだろう。

日本語と英語の違いに対する興味度についての回答は，「面白いと思った」35人（32％），「めんどうだと思った」33人（31％），「何とも思わなかった」21人（19％），「知っていた」19人（18％）であった。今回の読み物は多くの生徒の興味を引きつけたとは言えない。また，知っていたとする者が20％以下であるので，意図的に取り上げない限り学習する機会が少ないと言える。

6．事後テスト

各問の正文，標的文，ダミー文の正答者率を TABLE 1 に示す。正文の平均正答率は90％であった。ダミー文の平均正答率は事前と変わらず83％であった。読み物は人称代名詞に関する内容であるため，ダミー文での正答率が上昇しなかったのは納得できることである。標的文の平均正答率は79％であった。これは事前の正答

率(59％)に比べて大幅に上昇した。標的文について事前から事後への正答者率の変化を検討するため，各小問ごとに臨界比による検定を行ったところ，問4を除いて事後の正答率のほうが有意に高かった(問1 CR=1.8, 問2 CR=4.1, 問3 CR=5.9, 問5 CR=2.7, 問6 CR=5.5；片側検定, 問1のみ5％水準, その他は1％水準で有意)。問4の正答者率の変化が有意でなかったのは，事前の正答者率が83％と高かったことによると考えられる。全体としては読み物は効果を持ったと言える。

全体の討論

本研究では，中学生において英語の一人称と二人称の理解が不十分であることの実態が明らかにされた。このようなつまずきが大規模に生じていることはこれまでに指摘されておらず，この点を明らかにしたのは意味のあることであろう。このつまずきは，日本語における話者や相手の呼び方が英語の学習に干渉を及ぼすことから生じるつまずきと見なすことができる。言い換えれば，日本語に関する知識が不当に一般化されて用いられることから生じるつまずきと見なすことができる。またこのつまずきは，逐語的置き換え方略の程度と関連を持つことが示された。これは英語の学習方法の重要性を物語るものであり，言語教育という観点からも興味深い現象であろう。さらに本研究では，読み物を読むことにより，日本語の自称詞・対象詞と英語の一人称・二人称との違いを理解することができるようになることが示された。

ここで今回の出題方法について検討を加えておきたい。今回の出題方法に関しては，「紛らわしい英文」(標的文)を提示することで，被験者を間違いに誘導している可能性があるという批判があるかもしれない。しかしこの批判は正しくない。なぜなら「正しい英文」(正文)も併せて提示しているからである。一般的に，誤った選択肢だけを提示して正誤判断を求めるよりも，正しい選択肢と誤った選択肢を同時に提示して正誤判断を求める方が容易なはずである。ましてや正しい選択肢を「正しい」と認識できる場合には，それを元にして他方の選択肢を吟味できるから，このような問題事態は容易なはずである。それにもかかわらず，間違った選択肢も「正しい」と判断されてしまうということは，とりもなおさず，被験者の認識が十分ではないことを物語っているのである。

ところで，事前において標的文での誤りが相当見られたが，正文全体での正答率が高い点にも注意を払っておきたい。つまり，本研究の事前・事後テスト問題のような会話場面で実際に会話を行う場合に，今回の被験者は人称代名詞を用いて適切な発話ができる可能性はある。それでは，多くの者が標的文をも「正しい」と判断してしまうことの問題点はどこにあるのか。西林(1977)は，人が「あることがAである」ことを知っている状態を二つに区別することができると述べている。一つは「あることがAであること」だけを知っている状態であり，もう一つは「あることがBやCではなくてAであること」を知っている状態である。認識論的に言えば，前者よりも後者のほうが深い理解である。本研究の結果は，英語の一人称・二人称に関して深い理解に到達している者が少ないことを示している。多くの学習者は，日本語の「私は」が英語では「I」に当たること，また日本語の「あなたは」が英語では「you」に当たることは理解しているが，日本語の自称詞や対称詞に対応する単語を英語の一人称や二人称として用いることができないということを理解していないのである。この点を理解することで英語の一人称・二人称に関する理解が深まり，また，日本語と英語の違いに関する理解が深まることになる。本研究の結果は，通常の英語教育ではそこまで至っていないことを示している。筆者らは英語教育の観点から，そして日本語の特徴の理解という観点からこの点を問題にしているのである。

この深い理解に到達するのを阻んでいる一つの要因として，本研究では，英語学習における「逐語的置き換え方略」を指摘した。そして，逐語的置き換え方略の使用はテスト状況でやや強く，翻訳状況でやや弱いことが示された。このことは，学習者が日本語訳を学校のテスト

で求められた際には，逐語的な置き換えをするべきだと考えている可能性を示唆している。たとえば，日本語訳をする際に，冠詞を訳出したり，複数形だと判断できるように訳すというようにである。日本語と英語の共通の形に着目したこの方略は初学習者には有効な面を持つことは事実であろう。しかし，この方略ばかりを用いていると，日本語と英語の違いが理解できにくくなり，日本語に関する知識からの干渉が生じやすくなるのである。

もう一つ指摘しておきたいのは，英語の授業で取り上げられる日本語の文についてである。本研究の事前・事後テストで用いた日本文は，「お父さんなんて嫌い」「僕は，昨日，お父さんのカメラをこわしちゃいました」「おまえはお母さんのこと好き？」などであった。これは，われわれが普段用いている“自然な”日本語である。しかし，英語の授業では上記のような日本文を英語に直すというパターンは登場しない。その代わりに「私はあなたを嫌いです」「僕は，昨日，あなたのカメラをこわしました」「あなたは私を好きですか？」のような文が提示されることが多い。これらの文はいわば“教育的配慮”が加えられたものである。しかし，このような文だけを提示していると，逐語的置き換え方略の欠点にはなかなか気づきにくい。上記のような“自然な”日本文を積極的に用いることで学習者は日本語と英語の違いに気づきやすくなると考えられる。それによって概念変化を伴う学習となる可能性が生じるといえるのである。

本研究では英語の一人称と二人称の理解が多くの中学生において不十分であることを明らかにした。理解が不十分になる根本的な原因としては母国語における使用法が外国語の学習に干渉を及ぼすことが指摘できるが，さらに，逐語的置き換え方略によって英語の学習が概念変化を伴う学習になりにくい点を指摘できた。今後の研究としては下記の２点が必要となる。一つは，日本語からの干渉によって理解が不十分なままである学習内容は一人称・二人称という内容にとどまらないだろうという点である。英語の他の学習内容に即してこのような実態を明らかにしていくことが必要となる。もう一つは学習方法に関してである。今回一人称と二人称の学習で行ったように，英語を学習する際には，文や語句の構成規則や使用規則が日本語とは根本的に違うことを実感させて概念変化を引き起こすことが必要であると言える。今後はこのような観点から英語の学習方法を考える必要があるだろう。

引用文献

HASHWEH, M. Z. (1986). Toward an explanation of conceptual change. *European Journal of Science Education*, **8**, 229-249.

今井むつみ・野島久雄 (2003).『人が学ぶということ：認知学習論からの視点』北樹出版.

小篠敏明・深沢清治・萬谷隆一 (1983).『英語の誤答分析』大修館書店.

麻柄啓一 (1990). 誤った知識の組み替えに関する一研究. 教育心理学研究, **38**, 455-461.

西林克彦 (1977). 授業はいかにして成立するか. 柴田義松・竹内常一・為本六花治 (編)『教育学を学ぶ』有斐閣.

小山義徳 (2004). 英単語学習方略の使用と英語のエラー生起の関連についての実証的検討. 日本教育心理学会第46回総会発表論文集, 214.

進藤聡彦 (1995). 誤法則を明確化する先行課題が法則の修正に及ぼす効果. 教育心理学研究, **43**, 266-276.

進藤聡彦・麻柄啓一 (2000). 社会科学領域の素朴概念の形成メカニズムと修正ストラテジーに関する教育心理学的研究. 平成９年度～平成11年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（２））研究成果報告書.

鈴木孝夫 (1973).『ことばと文化』岩波書店.

立木徹・伏見陽児 (2003). 文学作品の誤った読みとりとその修正. 読書科学, **47**, 50-59.

吉國秀人 (2005). 英語の否定疑問文に対する一貫反応形成の試み―短期大学生を対象として―. 鹿児島県立短期大学人文学会論集, **29**, 51-62.

脚 注

1) 問題1では直訳文も意訳文も意味的には正しい訳であり，また問題2でもA君～C君の答えはいずれも意味的には正しい訳であるので，「正しい」「間違い」ではなく，このような表現を用いた。

2)「正誤判断」ではないのは以下の理由による。正誤判断の場合は，特殊な状況では標的文のような表現をする場合があるかもしれないと被験者が考える可能性が考えられる。「自然」「不自然」という用語によって，特殊な状況下ではなく，ごく普通の会話状況下でのことであることを示した。なお各小問ごとにこの教示は繰り返された(FIGURE 3参照)。

受付：2006. 4. 26
受理：2007. 5. 25

Insufficient Comprehension of the English First Person and Second Person Concepts within Japanese Students: Native Language Interference

OKADA, Izumi (Graduate school of education, Waseda University)
MAGARA, Keiichi (Waseda University)

Abstract

When Japanese people refer to themselves in conversation, in addition to using personal pronouns such as 'watashi wa' (I), 'watashi no' (my), and 'watashi ni' (me), they also employ ordinary nouns that express their social positions or roles. For example, a father speaking to his son may say 'Otosan likes this song' (literally, 'Father likes this song' in referring to himself). Similarly, Japanese people not only use 'anata wa' (you), 'anata no' (your), and 'anata ni' (you), but also employ ordinary nouns in referring to the person they are taking with. For example, a student speaking to his teacher would say 'Is this sensei's book?' (literally, 'Is this teacher's book?'). Taking such differences between Japanese and English into consideration, we may expect that when Japanese students are asked to translate Japanese conversational sentences into English, they will make grammatical errors. In this study, 120 junior high school students were presented with six Japanese conversation sentences. Each was accompanied by three types of English sentences: the correct translation where the appropriate personal pronoun was used, an incorrect translation where an ordinary noun was used to refer to either the speaker or the person being addressed, and an irrelevant sentence. The participants were asked to judge whether each of the English sentences were correct translations or not. Most of the participants judged the correct sentences as being correct and the irrelevant ones as being incorrect. However, about 40 percent of the participants judged the incorrect translations involving ordinary nouns as being correct. This finding suggests that knowledge of their native language (i.e., Japanese) has a negative influence on their comprehension for the English concepts of the first and second person. Moreover, the results from another task revealed that students who employed rigid word-for-word translation strategies made more mistakes than students who used a free translation strategy. In a subsequent session in the study, the participants were presented with a text where the differences between Japanese and English expressions for the first and second person were explained. After reading this text, the participants were again presented with the six Japanese conversation sentences as a post-test. As a consequence, about 80 percent of the participants were able to correctly judge the incorrect English sentences as being incorrect. This finding suggests that the text was effective in improving the students' insufficient comprehension.

The Science of Reading, Vol. 50, No.3・4 (2007)

「読者コミュニティ」の構築
ー同人誌コミュニティについての語りの分析からー*

筑波大学大学院人間総合科学研究科　石　田　喜　美**

1．はじめに

本稿の目的は，読者自身の実践によって「読者コミュニティ」[1]が構築される過程を明らかにすることにある。「読者コミュニティ」とは，さまざまなメディア・テクストの読者が自分たち自身の読むことの実践や経験を共有するコミュニティである。本稿では「読者コミュニティ」を，それぞれの読者によって行われる読むことの実践によって作り出され，維持され，あるいは変化させられるコミュニティとして定義する。

これまで，エスノグラフィー・アプローチによるリテラシー研究は，コミュニティを一つの固定的で安定的な実体として取り扱ってきた。例えば，エスノグラフィー・アプローチによるリテラシー研究の古典であるHeath (1983) では地理的・人種的・文化的に異なる三つのコミュニティをとりあげ，三つのコミュニティでのリテラシー実践の違いを報告している。また，エスノグラフィー・アプローチによるリテラシー研究の論文集であるStreet (1993) においても，異なる文化を持つコミュニティに注目し，それらのコミュニティにおけるリテラシー実践が報告されている。これらの研究では，ある一定の文化を持つ，固定的なコミュニティの存在が前提とされている。また，このような傾向は現在も継続しており，リテラシー教育においてリテラシーを研究するための指針として示されている (例えば Tobin, 2005)。

しかし，リテラシー実践を中心として見ようとする時，コミュニティとは必ずしも固定的で安定した実体ではありえない。むしろ，コミュニティとは人々によって営まれるリテラシー実践によって作り出され，変化させられるものでもある (Ahearn, 2001)。「読者コミュニティ」とはこのようなコミュニティの側面に注目した概念である。

カルチュラル・スタディーズ (cultural studies) の流れを汲む一連の読むことの実践の研究は，読むことの実践が「読者コミュニティ」を作り出し，また，「読者コミュニティ」に所属するメンバーのアイデンティティを創出することを明らかにしてきた (例えば Radway, 1984; McRobbie, 1991; Cherland, 1994; Finders, 1997)。

本稿ではこのような，読むことの実践と「読者コミュニティ」とのダイナミックな関係に注目する。具体的には，同人誌コミュニティ (Media Fanzine Community)[2] に関わるメンバーの語りを分析することで，語りという実践の中で「読者コミュニティ」が構築される過程を記述する。なお，本研究のリサーチ・クエスチョンは以下のとおりである。

○　どのような語りの構造の中で，独自の読むことの実践を有するコミュニティとしての同人誌コミュニティという枠組みが構築されるか。

(1) どのように日常世界とコミュニティとの間の「境界」(boundary) が作り出されるか。

---

* Construction of a reader community: Narrative analysis of experience in a media fanzine community.

** ISHIDA, Kimi (University of Tsukuba)

(2) コミュニティ内部の実践や関係性はどのように語られ，どのような「コミュニティ・ストーリー」(石田，2004)が生み出されるか。

2．方　法

2.1　データ収集法

本研究では同人誌コミュニティに関わった経験のある女性，辻井まい(仮名)(以下，辻井と略記)の協力を得て，彼女へのエスノグラフィック・インタビュー(ethnographic interview)を実施した。

エスノグラフィック・インタビューとは，半構造化インタビューとして分類されるさまざまなインタビュー法の一つであり，「インタビュー場面」として定めることのできる明確な時間と空間の枠組みを持たないことを特徴とする(フリック，2002)。エスノグラフィック・インタビューにおいてインタビュアーは，フィールドで出会う人々との自然なうちとけた会話の中で質問を行い，それに対する人々の応答を聞きとる。そのため，研究テーマと直接関わりのない雑談も多く行われる。エスノグラフィック・インタビューとは，そのような雑談の中で自然発生的に展開する質問と応答のやりとりである。本研究では，できるだけ自然な状況で生成される語りを収集するため，この方法を用いた。

インタビューは2004年の3月に行われた。所要時間は約120分である。インタビューでは調査協力者の同意を得た上でフィールド・ノートへの記録とテープ・レコーダーでの録音を行い，この二つの資料を分析のためのデータとして用いた。

2.2　調査協力者

本研究では，中学時代から同人誌コミュニティに関わり，インタビュー当時も同人活動[3]を続けていた，辻井に調査協力を依頼した。辻井は調査当時，大学生であったが現在は就職している。辻井は，大学入学以前は，友人の「サークル」[4]の活動を手伝うために同人誌コミュニティのイベントに参加していたが，大学入学後は辻井自身の「個人サークル」を結成して，イベントへの参加を行った。また，同人活動に関わるホームページを作成し，そこで自分の書いた小説や日記等を公開した。現在はイベントへの参加やホームページでの活動を休止しているが，インタビュー当時は，イベントへの参加とホームページの運営の両方を行っていた。

表1：インタビュー・ガイド[5]

読書一般	読書の個人史	1	自分の楽しみのために読書をはじめたのはいつ頃からですか？(開始)
		2	その後，自分が読む本がどのように変わったか教えてください(本)
		3	本を読むのは，いつどのような時でしたか？(状況)
	現在の読書活動	4	現在はどのような本を読んでいますか？(本)
		5	現在はいつどのような時に本を読んでいますか？(状況)
	同人誌の定義	6	同人誌の定義を教えてください(定義)
	同人誌の個人史(開始)	7	同人誌の存在を知ったのはいつですか？(知る)
		8	同人誌をはじめて読んだのはいつですか？(読む)
		9	同人誌をはじめて読んだ時はどのような状況でしたか？(状況)
		10	同人誌をはじめて読んだ時どのような感想をもちましたか？(感想)
同人誌	同人誌の個人史(現在まで)	11	その後，どのような同人誌を読みましたか？(同人誌)
		12	いつも，どのような時にどのような場所で同人誌を読みましたか？(状況)
	現在の同人活動	13	現在はどのように同人誌に関わっていますか？(活動)
		14	現在はどのような同人誌を読みますか(同人誌)
		15	現在はどのような時にどのような場所で同人誌を読みますか？(状況)
	同人誌の好み	16	好きなストーリーのパターンを教えてください(好き)
		17	嫌いなストーリーのパターンを教えてください(嫌い)
	同人誌の交流	18	他の同人活動に関わる人をどう思いますか？(他人)
		19	同人誌即売会に参加することについてどう思いますか？(即売会)

調査者と辻井は友人同士である。調査者自身も同人活動に関わっているが，辻井の同人活動にはまったく関与していない。調査終了後，調査者は辻井自身によって紹介されたホームページを閲覧しているが，この事実は本調査とは無関係である。

2.3 質問項目

質問項目に関しては，①「読書一般」に関わる5項目と②「同人誌」に関わる14項目からなるインタビュー・ガイド(表1)を設定した。しかし，本調査ではできるだけ調査協力者に自由に語ってもらうことを原則とし，できるだけ自然な会話の流れの中で，インタビューを行った(2.1参照)。

2.4 分析方法

本研究では，テープ・レコーダーで録音されたインタビューを主な分析対象として用い，インタビュー場面で作成されたフィールド・ノートは補足資料として用いた。なお，テープ・レコーダーで録音した資料を分析に用いる際には，インタビュー内容をすべて文字化したもの(transcription；トランスクリプション)を作成し，これをデータとして用いた。

分析にあたっては，ナラティブ分析(narrative analysis)(フリック，2002)の手法を用いた。ナラティブ分析とは，語りによる「現実」の構築に注目し，語りが行われる中でどのような「現実」が構築されるかを分析する方法である(フリック，2002；やまだ，2005)。本研究では，辻井による同人誌コミュニティについての一連の語りに注目し，この語りの中でどのように「読者コミュニティ」が構築されるかを分析する。

3. 結 果

以下，このリサーチ・クエスチョンに対応するかたちで説明を行うために，辻井が同人誌コミュニティについて述べた，一連の語りについて詳細に検討する。

3.1 日常世界と異なる場所の構築：鍵概念としての「世界」

以下に示す語り(語り1)は，辻井が同人誌コミュニティにおける「自己」の位置づけについて述べたものである。この事例から，「世界」という用語が，同人誌コミュニティにおける「自己」の位置を語る際の鍵概念となっていることがわかる。

この「世界」という用語は，辻井のインタビュー全体の中で全部で37回登場している。前半30分で3回，後半30分で34回である。またこのうち，辻井の発話にあたるものは前半が2回，後半が24回で合計26回である。本稿が事例としてとりあげるのは，後半部の「語り」であるが，本稿がとりあげた事例の中に「世界」という用語は11回登場している。このことからも，本稿でとりあげた辻井の「語り」において「世界」という用語が重要であることがわかる。

以下，この「世界」という用語が辻井の語りの中でいかに用いられるかを分析する。これによって，辻井が同人誌コミュニティを日常世界と異なる特別な場所として意味づける過程を分析する。

【語り1：日常世界と異なる場所の構築（辻井）】

1-1 辻井(以下，T)：うーん，なんだろ。(・)そういうー，メジ
1-2 ャーな版権もの[[一般的なメディア]]は
1-3 ー，けっきょくじぶーん，がー，入りこめ
1-4 るかどうかじゃーん，それに。でも同人
1-5 はー，じぶーんが入り込みたいところを
1-6 選べるぅ？っていうことかな。
1-7 インタビュアー(以下，I)：自分が入り込みたいとこを
1-8 選べるっていうのは
[
1-9 T： だからこうゆう世界がい
1-10 いなって思って，それを書いてる人のところにいけ
1-11 るでしょ？
1-12 I：うんうん。普通の（一般的なメディア）は？
1-13 T：普通のはだからー，なんだろう。ある程度やっぱじ
1-14 ぶーんがその世界に入りこむために作家の世界に
1-15 合わせるじゃない？

同人誌(Fanzine)は，同人誌コミュニティでのコミュニケーションにおいて中核的な役割を果たす雑誌である。「語り1」に示された辻井の語りの中で，「同人」

(1-4)，すなわち同人誌は「メジャーな版権もの」(1-1から1-2)，すなわち，一般的なメディアと対比の中で語られる。ここでは，「世界」という用語が用いられることによって，一般的メディアの流通する日常世界と同人誌コミュニティとの対比が可能になっている。そしてその対比によって日常世界と同人誌コミュニティとの間に「境界」が作り出され，日常世界と同人誌コミュニティそれぞれが，「自己」との関わりの中で意味づけられる。

日常世界において，一般的メディアにおいて提供される「世界」とは，「作家の世界」(1-14)である。その「世界」は「自己」とは無関係に存在するものであり，複数用意された既存の選択肢の中のいずれかを選択し，「作家の世界に合わせる」(1-14から1-15)ことが必要となる。そのため，日常世界においては，既存の選択肢の中に存在する「作家の世界」に「入りこめるかどうか」(1-3から1-4)，「合わせる」(1-15)ことができるかどうか，という点が問題となる。

これに対して，同人誌コミュニティでは，既存の選択肢よりも，「世界」を選択する「自己」が優位に位置づけられる。同人誌コミュニティにおいて，「世界」の選択肢は無数にあり，「自己」の関心に沿った「世界」を模索することができる。そのため，同人誌コミュニティにおいては，「こうゆう世界がいいな」(1-9から1-10)と思えるような「世界」，「自分が入り込みたいところ」(1-5)を選ぶことができる。このようにして選ばれた「世界」は「自己」にとって無理なく入りこめる「世界」である。日常世界においては，「自己」の持つ関心を既存の「作家の世界」のかたちに沿って変えていく必要があった。しかし同人誌コミュニティにおいて「自己」の関心はそのまま，かたちを変えることなく，入りこみたい「世界」の中で受け入れられる。

このように，「自己」とは無関係な「作家の世界」を提供する日常世界との対比の中で同人誌コミュニティが語られることによって，同人誌コミュニティは，日常世界とは異なる，ある特別な読むことの実践を共有する読者たちがいる場所として意味づけられる。

もちろん，実際の同人誌コミュニティにはさまざまな人々が参加しており，ここで辻井によって語られるような読者ばかりが存在するわけではない。しかしここで重要なことは，辻井が自らの語りの中で，日常世界と異なる読むことの実践を持つ人々がいる場所として同人誌コミュニティを意味づけたことにある。ここで辻井は，「世界」という用語を用いて，日常世界と同人誌コミュニティとの差異を語る。こうして日常世界と同人誌コミュニティとの差異が語られ，それぞれが異なる実践を持つ別々の世界として語られることによって，日常世界と同人誌コミュニティとの「境界」が作り出される。

3.2 「コミュニティ・ストーリー」の生成

(1)「世界」から「仲間」へ

以下の事例は，「語り1」の続きにあたる。辻井が，一般的なメディアと同人誌との違いについてさらに詳細な説明を行おうとしている場面である(語り2)。

なお，ここでは「世界」という言葉の意味の展開を関連語との関わりで分析するために，以下のような基準で記号を施す。まず，「世界」や「世界」という言葉の展開と考えられる言葉に囲みを施し，次に，それらの役割等を示す言葉に二重線を施す。

「語り2」では，「世界」という言葉が，「家」というメタファーを経て，「お仲間」という言葉に展開していく様子を見ることができる。また，それに伴って，「主」－「お客さん」という非対称な関係によって語られていた同人誌コミュニティの中の人々の関係性が「お仲間」という対称的な関係性へと変化することもわかる。ここで重要なのは，「お仲間」という言葉が，対称的な役割関係を示す用語であるというだけでなく，「世界」「家」のような場所を示す用語として用いられているという点である。

このことは，2-28から2-30にかけての「自己引用」(メイナード，1997)を見ることで，さらに明らかになる。「こんにちはこの世界いいですねー」(2-28)という語

【語り2：「世界」から「仲間」へ(辻井)】

2-1 辻井（以下,T）：で，同人はー
2-2 インタビュアー（以下,I）：うん
2-3 T：そのまぁ他の人が書いたのだ，から，けっきょくお
2-4 客さんなんだけどーその世界観っていのはー，そ
2-5 のー自分ー，が，は【わ】こうだったらいいなって世
2-6 界をー，誰が書いてるかっていうのを求めてーいく
2-7 わけだからー，なんだろ，より，(・・)うーーん(・)な
2-8 んだろう，ま，お客さん感はー，少ない感じ，になる
2-9 のかなー。
2-10 I：お客さん感は少なくて，なんになるんだろう。
2-11 T：なんになるんだろう。なん，自分が書いて，たら
2-12 ー，まぁ完全に，主【ぬし】だけどー，ウフフフフ
[
2-13 I： うーんうん
2-14 まあ，そうやね。
2-15 T：完全に主だけどー，
[
2-16 I： ぬ，主ですわ。
2-17 (・・)
2-18 T：なんて言えばいいのかなー。(・)家に帰ってきた
2-19 な，とはまた違うような気もするしなー。
2-20 (・)
2-21 I：なんだろう。
2-22 (・・・)
2-23 T：でも仲間の中に入るって感じかもしれない。
2-24 I：仲間，あー，なるほどね。仲間の中に，入る。
2-25 T：そうそう。だからー，
2-26 I：うーん
2-27 T：おきゃ，く，さっきお客さんってゆったのはー，す
2-28 ごくなんか，こんにちはこの世界いいですねーっ
2-29 ていう感じだけど，同人はー，あーっやっほーっ
2-30 て言って，やっぱここいいよねーっていうそういう
2-31 お仲間的な感じ。
2-32 I：ふんふんふんふんふんふんふん。なる
2-33 ほどなるほど。(・)お仲間，なるほどね。

り手の「声」，そして，それと対比される「あーっやっほー」(2-29)「やっぱここいいよねー」(2-30) という語り手の「声」はどちらも，あいさつ(「こんにちは」)や呼びかけ(「あーっやっほー」)が含まれており，そこにあたかも「声」をかけるべき相手がいるかのような印象を与える。そして，「家」や「ここ」といった「場所」を示す言葉が用いられることで，その「声」をかけるべき相手が，ある特定の意味を持つ場所に存在していることが示される。その特定の意味を持つ場所は，最終的に「仲間」「お仲間」という言葉で表現される(2-23, 2-31)。

「語り1」や「語り2」の2-4から2-6において用いられている「世界」という言葉が示しているのは，特定の領域を持つ場所にその場所を司る特定の人物(「主」)が存在するというイメージである。これに対し，「語り2」の2-23以降で用いられる「仲間」「お仲間」という言葉が示すのは，「あーっやっほーっ」(2-29)「やっぱここいいよねー」(2-30)と声をかけ合うことができるような，「自己」と経験や感覚を共有し合う人々の集まる「コミュニティ」のイメージである。「世界」という言葉が他との「境界」を引くことによって作り出される領域としての場所を示すとすれば，「仲間」「お仲間」は人々の関わりによって生成・維持される「コミュニティ」を示している。

このような，人々による集合体としての「コミュニティ」を示す「仲間」「お仲間」という言葉が創出されることによって，日常世界と同人誌コミュニティとの差異がさらに明確化される(2-27から2-31)。これによって，日常社会の中で提供される一般メディアは，境界によって区切られた場所，すなわち「世界」を持つものとして意味づけられる。また，これに対し，同人誌コミュニティは，「仲間」「お仲間」と呼ばれる人々の関係性の中で作り出される「コミュニティ」として意味づけられる。

このような意味づけの変化が生じることによって，一般的メディアと同人誌，そしてこれらが象徴する日常世界と同人誌コミュニティとは全く異なる次元のもの，比較することが不可能なものとして切り離される。そしてこのような切り離しが生じることによって，それまで「お客さん」として示されていた「自己」が，「お仲間」の一部として示されるようになる。「お客さん」とは既存の「世界」に接近する個人であるが，「お仲間」は一つの「コミュニティ」を共同的に構成する人々の集合体である。このようにして，「語り1」で「日常世界とは異なる特別な場所」として意味づけられた同人誌コミュニティは，単なる「場所」ではなく，人々の関係の中で生成される「コミュニティ」としての意味を付与される。

ここでは，「主」-「お客さん」関係を軸とした一般的な「ストーリー」から，「お仲間」関係を軸とした同人

誌コミュニティの「コミュニティ・ストーリー」(石田, 2004)への「ストーリー」の転換を見ることができる。「コミュニティ・ストーリー」とは，語り手個人によって語られる「わたしのストーリー」と，社会で支配的な「ストーリー」との間に存在する「ストーリー」であり，語り手の属する「コミュニティ」によって創出され，共有された「ストーリー」である[7)]。「お仲間」関係として語られる「ストーリー」は，社会で支配的な「ストーリー」とは異なり，また，語り手個人の「ストーリー」とも異なる。すなわち，「お仲間」関係の「ストーリー」は，語り手を含む同人誌コミュニティの「ストーリー」として語られているという点で，「コミュニティ・ストーリー」であるということができる。

(2)「仲間」関係から「コミュニティ・ストーリー」へ

次に，辻井によって語られる「コミュニティ・ストーリー」についてさらに詳細に検討するために，「世界」「家」「仲間」等の言葉で示される「場所」についての語りに焦点を当てる。以下の事例(語り3)は，「語り2」に続く会話である。なお，ここでは「世界」という語に囲みを施し，「世界」という語の関連語には二重線を施している。

【語り3：「コミュニティ・ストーリー」の生成（辻井）】

(同人誌をめぐる世界は「お仲間的な感じ」だというまいの語りを聞いて)
3-1　インタビュアー(以下,I)：なんか複雑な微妙な世界が,
3-2　辻井(以下,T)：微妙な世界，だけどね。
3-3 I：そうか。(・・)お客さん。(・)そんなこ，そうか，みんな
3-4　主【ぬし】だもんな。
3-5 T：うん
3-6 I：うーん(・)ほーなるほどねー。うん，わかった。いろい
3-7　ろホホ。
3-8 T：うん。でなんだろ，たぶんー，同人界はあるていど影
3-9　響しあうところもあるからー，
3-10 I：その
　　[ ]
3-11 T：おたがいにー，書いてお互いに読むでしょ。んで
3-12　ー，そうするとなんかすごいこれわかるって思うと
3-13　盗作とかじゃなくてだんだん自分の世界観にそれ
3-14　が入ってくるのね。そうするとー，なんかそのー，ジ
3-15　ャンルのー，世界っていうのがー，みんなでだん
3-16　だん統一感が出てきてっていうのがあるからー，
3-17　ま，その中でもいろいろあるんだけどー，その好き
3-18　な，
3-19 I：うん
3-20 T：あるんだけどー，でも，みんなで作ってく感ってのの
3-21　があるのかもしれない。その世界を？ひとつの世
3-22　界を。

「語り1」において「世界」という言葉は，作者や読者個人に属する世界観を意味していた。しかし「語り3」において，「個人に属する世界観」という意味で「世界」が用いられているのは「自分の世界観」(3-13)のみである。それ以外の「世界」という言葉は「コミュニティ」に属するもの，あるいは「コミュニティ」そのものを意味する。例えば，3-8の「同人界」という言葉は同人誌コミュニティを一つの「世界」として示す用語である。また，「ジャンルの世界」(3-14, 3-15)は「ジャンル」で括られた「コミュニティ」全体が持つ集合的な世界観を示す。

「語り3」の前半(3-1から3-9)では，これら二つの「世界」の意味，すなわち①「個人に属する世界」という意味と②「コミュニティそのもの，あるいは，一部」という意味とが，重ね合わされながら語りが進行する。さらに，3-11から3-16では個人が持つ「世界」と「コミュニティ」が持つ「世界」とが重ねあわされ，これら二つの意味が融合される。これによって，個人と「コミュニティ」，そして「コミュニティ」が持つ世界観とが融合され，最終的にはそのような融合状態が「世界」という一つの言葉でまとめられる(3-20から3-22)。

「語り3」からは，辻井の語りが展開する中で「世界」という概念の意味が変化しているという事実を確認することができる。すなわち，個人に属する世界観を意味するものから，「コミュニティ」そのものにおける融合状態を意味するものへの変化である。

これは，「語り2」で検討したような用語それ自体の変化とは異なる変化である。「語り2」では用語それ自体を変化させることによって，日常世界とは異なる同人誌コミュニティの関係性(「仲間」)を，語りの中で作り出していた。しかし「語り3」では，「世界」という概念の意味が展開することによって，同人誌コミュニティの内部における読むことの実践のあり方やメンバー同士

の関係性についての「ストーリー」，すなわち「コミュニティ・ストーリー」が構築される。そして，このような「コミュニティ・ストーリー」が構築されることによって日常世界とは異なる，特別な読むことの実践を有するコミュニティ，すなわち，特別な「読者コミュニティ」の存在が調査者と調査協力者との間で共有され，それがあたかもすでに存在した実体であったかのような印象を形成する(語り4)。

3.3 特別な「読者コミュニティ」の実体化

「語り4」は「語り3」の後，2秒のポーズをおいて開始された会話である。ここでは，インタビュアーが自分の解釈を辻井に提示している。ここでインタビュアーによって用いられる「同人」という用語の使用を見ると，調査者と調査協力者との間で，特別な「読者コミュニティ」，すなわち，日常世界とは異なる特別な読むことの実践を持つ人々が集まって作り出す「コミュニティ」の存在が実体として語られ，共有されていることがわかる。なお，ここでは個々人や人々の集団を示す言葉に囲みを付し，日常世界に関する記述に波線を，同人誌コミュニティを示す記述に下線を施した。

【語り4:コミュニティの実体化（辻井）】

4-1 インタビューア(以下,I)：それは？本編ー，(・)本編って
4-2 いうのはある意味この世界観，っていうのは，お客に委
4-3 ねられてるところがあるのかな。
4-4 (・)
4-5 辻井(以下,T)：というのはどういうことだろう。
4-6 I：ん。ようするに，本編っていうのはー，
4-7 T：うん。(・)えっと原作ってこと？
4-8 I：　[解釈が開かれてるんじゃないか
4-9 な。(・)うん。ようするに同人に参入しない人もー，読
4-10 むわけでしょ？＝
4-11 T：＝そうそうそう。
4-12 I：そういう意味でー，なんだろ，多様な，
4-13 T：うん
4-14 I：あっ＝
4-15 T：＝うん＝
4-16 I：＝同人よりは，なんかす，いろんな世界観が付随す
4-17 る可能性が，ある。
4-18 T：あるぅ，ね。
4-19 I：だけどー同人の人たちってのはそこで，(・)ひとつ
4-20 の世界観を作りあげようとしている。
4-21 (・・)
4-22 T：うん。そこ[[原作]]から分派したものもー，共有して
4-23 ってことだと思う。
4-24 (・・・)
4-25 I：深いねー，同人。フフフ

「語り4」で調査者は，「同人」(4-16, 4-25) あるいは「同人の人たち」(4-19) という形で，実体化した「読者コミュニティ」の存在を示している。この「同人」「同人の人たち」に対照される言葉が「お客」(4-2)「同人に参入しない人」(4-9) である。「お客」「同人に参入しない人」は，その多様な読むことの実践やテクストの解釈によって特徴づけられる (4-12, 4-16, 4-17)。それに対し，「同人」「同人の人たち」は，実体化されたコミュニティのメンバーとして読むことの実践を行い，最終的には一つの「世界観」を作り上げる存在である (4-19, 4-20)。すなわちここでは，「お客」「同人に参入しない人」が個々バラバラな読むことの実践を行うのに対し，「同人」「同人の人たち」は特別な「読者コミュニティ」としての実践を行う，という比較がなされている。このとき，調査者と調査協力者との間には，「同人」「同人の人たち」という言葉によって示される「読者コミュニティ」の存在が実体として存在している。

しかし，これまでの分析からも明らかなように，同人誌コミュニティは，初めから特別な「読者コミュニティ」として存在していたわけではない。既に述べたように，同人誌コミュニティにはさまざまな人々が参加しており，すべての人々が特別な読むことの実践を共有しているわけではない。特別な「読者コミュニティ」の存在は，辻井が一般的なメディアと同人誌とを比較する中で，日常世界と異なる場所として同人誌コミュニティを意味づけ，その後，その特別な「読者コミュニティ」を説明するための言語や「ストーリー」が作り出されることによって構築された。以上の過程を表にまとめると表2のようになる。

表2：コミュニティ構築の過程

比較対象の発見	一般メディアと同人誌の比較（1-1から1-6）
↓	
「日常世界と異なる場所」の構築	あるコミュニティが「日常世界と異なる場所」として意味づけられる（1-9から1-15）
↓	
言語の創出	「仲間」という言葉の創出（2-23から2-31）
↓	
「ストーリー」の生成	コミュニティの中における具体的な関係性や実践を語る（3-11から3-22）
↓	
コミュニティの実体化	語り手と聞き手によるコミュニティの存在の確認（事例4）

4．考　察

以上，辻井の語りを手がかりとして，語りという実践において「読者コミュニティ」が構築される過程を記述してきた。プラマー（1998）はこのような語りによる「コミュニティ」の構築について次のように述べている[8]。

ストーリーは，それに耳を傾けるコミュニティが必要であるが，コミュニティそれ自体もまた，ストーリー・テリングを通して構築される。ストーリーはそのまわりに人びとを集めるのである。ストーリーはオーディエンスを魅きつけなければならないし，オーディエンスは，共通の認識，共通の言語，共通性（commonality）を構築し始める。（プラマー，1998，p374）

本研究で明らかになったことをこの観点から解釈すると以下のようになる。特別な「読者コミュニティ」としての同人誌コミュニティの存在は，辻井によって語られる「ストーリー」と，それに魅きつけられた「オーディエンス」としての調査者によって共同的に構築された。このように「読者コミュニティ」とは，初めから実体として存在しているのではなく，語りのような実践の中で構築されるものである。

エスノグラフィー・アプローチによるリテラシー研究がこれまで明らかにしてきたように，「読者コミュニティ」には，特定のコミュニティの文化の中でその影響を受けながら構築されるという側面がある。しかしその一方で，「読者コミュニティ」には，人々によって営まれる実践の中で構築されるという側面も存在する。本研究が明らかにしたのは，このうち後者の側面，すなわち，メディア・テクストの読者自身の実践によって「読者コミュニティ」が構築されるという側面である。

本稿では，インタビュー場面における語りを分析し，語りの中で「読者コミュニティ」が構築される過程を記述した。しかし，このような「読者コミュニティ」の構築は，日常的な文脈の中で「読むこと」の実践を行い，会話し，語り合う中で行われるものである（プラマー，1998）。今後は，エスノグラフィー・アプローチによる読むことの実践についての研究が重ねられる中で，人々が日々の実践の中で「読者コミュニティ」を構築する姿を明らかにしていく必要があろう。これについては，今後の課題とする。

注

1）「読者コミュニティ」とは筆者による造語である。類似の概念にフィッシュ（1992）によって提起され，Radway（1984）によって展開された「解釈共同体」（interpretive community）という概念があるが，テクストの解釈だけではなく，読むことの実践そのものや経験を共有するコミュニティであることを強調するため，本稿では「読者コミュニティ」という用語を用いる。なお，類似した概念として夏目（2005）による「読者・作者共同体」という概念がある。これは「読者コミュニティ」と（一般メディアの）作者との間に構築されているコミュニティに注目した概念である。本稿で扱う同人誌コミュニティにおいて流通する同人誌も，誰もが作者にも読者にもなれるという点では，「読者・作者共同体」と呼ぶ方が適当であるとも考えられる。しかし本稿では，調査協力者である辻井が読者としての自分の経験に焦点を当てて語りを展開していることから「読者コミュニティ」という概念を用いた。

2) 「同人誌コミュニティ」(Media Fanzine Community)という用語はBacon-Smith(1992)による。同様の概念として,「ファンダム」(fandom)や「メディア・ファンダム」(media fandom)(小林, 1996)などがあるが,本稿では,研究協力者である辻井まいが同人活動を主に行っており,同人誌の読者としての経験に焦点を当てた語りを行っていたため「同人誌コミュニティ」という用語を用いた。なお,小林(1996)は「メディア・ファンダム」(本稿でいう同人誌コミュニティに相当)を単にメディア・テクストを受容し,受容の「喜び」を共有し合う「コミュニティ」ではなく,そのような「喜び」を生産活動へと転化し,さまざまなメディア資源を利用しながらこれらの生産活動を展開する「コミュニティ」と定義している。

3) 「同人活動」とは,同人誌コミュニティに関わる活動のうち,特に同人誌やホームページ等,さまざまなメディアを利用した創作活動に関わる一連の活動を意味する。

4) 「サークル」とは,「同人誌」等,さまざまな同人メディアを利用した創作活動を行う集団のことを意味する。

5) このインタビュー・ガイドはRadway(1984)を参考に作成した。

6) 文字化(トランスクリプト)を行うため,桜井(2002)を参考にして,以下のトランスクリプト記号(表3)を用いた。

表3:トランスクリプト記号

[ ]	同時発話・重複発話
=	連続発話
(・・)	小休止・途切れなど発話内・発話間の時間的感覚 (ドット(・)は約1秒の休止を示す)
ーー	音の引き延ばし
句点(。)	文の切れ目
読点(,)	語句の断続を明らかにする息つぎ
疑問符(?)	上昇音調
ハハハetc	笑い.笑いは音をカタカナ表記する
(( ))	状況説明
[[ ]]	語句の説明
( )	補足
【 】	語句の発音

7) 桜井(2002)では類似した概念として(コミュニティの)「モデル・ストーリー」という概念が提案されている。「コミュニティ・ストーリー」と「モデル・ストーリー」との最も大きな違いは「コミュニティ・ストーリー」という概念が,語り手の主観を重んじた概念であるという点である。実際にコミュニティの中で創出,あるいは,共有された「ストーリー」でなくとも,語り手がコミュニティによって創出,あるいは,共有された「ストーリー」として,その「ストーリー」を語るのであれば,その「ストーリー」は「コミュニティ・ストーリー」と見なされる。

8) プラマー(1998)は,インタビューや質問票を送る調査者などの人々を「ストーリー」の「第二の生産者」(p.41)として位置づけている。そのため,ここで引用するプラマー(1998)の議論は,日常的に行われるさまざまな実践と同様,インタビューの場面で行われる語りという実践にも適用可能であると考えられる。

引用文献

AHEARN, L. M. (2001). *Invitations to love: literacy, love letters, and social change in Nepal*. Ann Arbor, MI: University of Michigan Press.

BACON-SMITH, C. (1992). *Enterprising women: television fandom and the creation of popular myth*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.

CHERLAND, M. R. (1994). *Private practices: girls reading fiction and constructing identity*. London: Taylor & Francis.

FINDERS, M. J. (1997). *Just girls: hidden literacies and life in junior high*. New York: Teacher College Press.

フィッシュ, S. 小林昌夫訳(1992).『このクラスにテクストはありますか—解釈共同体の権威』みすず書房.

フリック, U. 小田浩志・山本則子・春日常・宮地尚子訳(2002)『質的研究入門—<人間の科学>のための方法論』春秋社.

HEATH, S. B. (1983). *Ways with words*. Cambridge:

Cambridge University Press.

石田喜美 (2004). スティグマのある読むことのライフ・ストーリー —同人誌に関わった経験をもつ二人の少女の語りを事例として—. 日本読書学会第48回研究大会発表資料集, 74-83.

小林義寛 (1996). from Folk to Filk—「密猟的文化」あるいは草の根の創造活動の可能性へ向けて. 生活学論叢, 1, 97-106.

MCROBBIE, A. (1991). *Feminism and youth culture: From Jackie to Just Seventeen*. London: Macmillan.

夏目房之助 (2005).『マンガは今どうなっておるのか？』メディアセレクト.

プラマー, K. 桜井厚・好井裕明・小林多寿子訳 (1997).『セクシュアル・ストーリーの時代—語りのポリティクス』新曜社.

RADWAY, J. A. (1984). *Reading the romance: women, patriarchy, and popular literature*. Chapel Hill and London: The University of North Carolina Press.

桜井厚 (2002).『インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方』せりか書房.

メイナード, S. K. (1997). 引用表現と「声」の操作 泉子・K・メイナード著『談話分析の可能性 理論・方法・日本語の表現性』くろしお出版, pp.143-173.

SPRADLEY, J. P. (1979). *The ethnographic interview*. New York: Holt, Rinehart & Winston.

STREET, B. (1993). *Cross-cultural approaches to literacy*. Cambridge: Cambridge University Press.

TOBIN, J. (2005). Strengthening the use of qualitative research methods for studying literacy. *Reading Research Quarterly*, **40**, 91-95.

やまだようこ (2005). ライフストーリー研究 インタビューで語りをとらえる方法. 秋田喜代美・恒吉僚子・佐藤学編著『教育研究のメソドロジー 学校参加型マインドへのいざない』東京大学出版会, pp.191-216.

受付：2006. 4. 1
受理：2007. 5. 21

Construction of a Reader Community: Narrative Analysis of Experience in a Media Fanzine Community

ISHIDA, Kimi (University of Tsukuba,)

Abstract

In Japan, avid readers of a particular genre of writing have constructed a community for themselves—a media fanzine community of people who read, write, and share information about specific topics. The community helps members share their experiences as readers. How do avid readers feel about the community? This article reports on the analysis of a narrative where a member of the media fanzine community talks about the community's meaning.

The participant is a female Japanese university graduate who is a member of the media fanzine community. The participant was informally interviewed by the researcher who is also a member of the same community and was already acquainted with the participant. Other than encouraging the interview towards discussing the significance of the media fanzine community, the researcher did not attempt to direct the interview. The 90-minute conversation was tape-recorded for subsequent analysis. The researcher also took notes.

A narrative analysis was conducted in order to describe the narrative process where the meaning of the media fanzine community was constructed. The results indicate that there is a five stage process through which reader communities are socially constructed. (1) One discovers a position that differs from one's own. (2) A 'boundary' is constructed between one's position and the other position. (3) A term is created in order to label one's own position. In this way, one's position becomes a "community". (4) A story is constructed that accounts for one's community. (5) One shares the story with other people. In this way, the community is realized.

These findings suggest that we construct reader communities and their meaning through our activities, such as creating narratives, engaging in dialogues, as well as reading.

The Science of Reading, Vol. 50, No.3・4 (2007)

派生語認知における語基の出現頻度と接辞の種類の効果*

奈良女子大学　中　山　満　子**

研究の目的

複数の形態素からなる単語が心的辞書(mental lexicon)内にどのように貯蔵されているのか，そのような単語では語彙アクセス(lexical access)においてどのような単位の処理が行われるかについて，アルファベット系言語を中心として盛んに研究されている。そして多くの研究が，語彙アクセス過程において単語が形態素に分解(decomposition)して処理されることを支持している。形態論では，複数の形態素から構成され，複合，派生，ないし屈折を受けた単語を合成語(complex word)と呼ぶ(景山，1993, p.13)。本論では，以下，派生語などの複数の形態素から構成された形態学的に複雑な単語を合成語と表記する。合成語を作る際に土台となり，独自の意味的まとまりを持つ要素を語基[1)](base)，語基に付着することによって機能する要素を接辞(affix)と呼ぶ(景山，1993，p.13)。

例えば，Longtin and Meunier (2005)は擬似派生語を用いたプライミング実験を行い，処理の初期における形態素への分解を主張している。フランス語を用いた彼らの実験では，プライムとして語根[2)]と接尾辞を組み合わせた擬似派生語(例：rapidifier)を提示し，語根(例：rapide)へのプライミング効果が生じるかどうかを調べた。その結果，擬似派生語から語根へ有意なプライミング効果が見られた。プライムとして用いられた擬似派生語そのものは心的辞書には貯蔵されていない。従って，彼らの研究で得られたプライミング効果は，プライムを構成する語根の活性化によるものであると考えられ，形態素への分解過程が生起している証拠と解釈される。

また語彙アクセス過程において，形態素への分解が生じるかどうかの一つの指標として，合成語そのものの出現頻度(surface frequency)を一定とした場合の語基の出現頻度の効果(base frequency，以下語基頻度)を操作した実験が行われ，多くの先行研究で語基頻度の効果が確かめられている。出現頻度の高い単語は出現頻度の低い単語に比べて語彙アクセスの成立が早いという現象は，単語出現頻度効果(word frequency effect)として広く知られた頑健な現象である(解説は，例えば Taft, 1991)。語基頻度効果は，単語出現頻度効果と同様のメカニズムで生じると考えられる。すなわち語基頻度効果は，心的辞書内に語基の表象があり，語彙アクセスのいずれかの時点で語基を単位とした処理が行われ，語基の表象が活性化するときに，頻度の低い語基に比べて高い語基の方が活性化されやすいことにより生じる。逆に言うと，語彙性判断課題など語彙アクセスを反映していると考えられる課題において語基頻度の効果が得られるということは，語彙アクセス過程において語基を単位とした処理が行われているということであり，合成語が語基に分解されていることを示している。

合成語の形態素への分解が常に生じるという強い立場をとる研究者(例えば，Taft, 2004)もいるが，いくつか

* The effects of base frequency and affix type in the word recognition of Japanese derivational words.
** NAKAYAMA, Michiko (Nara Women's University)

の研究では語基頻度効果が得られず，言語の特徴によって，あるいは単語のタイプによっては形態素への分解が生じないとの主張もある。そこで本研究では，日本語の漢字のみから成る派生語を用いて，語基頻度効果の有無を探索的に検討することを目的としている。

本研究では日本語の二文字単語[3)]を語基とし，接辞を付加した三文字単語を用い，合成語の認知過程を調べる。漢字は一文字で形態素であり，語根である。二漢字からなる語基は自由形態素であることが多く，単語として出現する頻度も高い。非常に生産力が高く，三文字，四文字あるいはそれ以上からなる合成語の語基になる。また日本語には接頭辞と接尾辞の二種類の接辞が存在する。接頭辞は語基に意味を付加する機能を持つ。他方，接尾辞は意味を付与することもあるし，文法的カテゴリーを変化させることがある（景山, 1993）。

漢語系派生語の特徴としては，多くの接辞は漢字一文字からなること，屈折しないこと，接辞の数が多いことがあげられる。接尾辞は特に数が多く，生産性も高い。意味の透明性は概して高く，不透明になることはほとんどない（日本語の派生語の言語学的特徴については，Miyaoka & Tamaoka (2005) に詳しい）。アルファベット系の言語における派生語に比べると，形態素の区切りが視覚的に明瞭である（玉岡・初塚, 1995）ことも特徴である。

漢字単語の認知の研究は数多く行われているが，そのほとんどが二文字から構成される単語を扱っている（例えば，Joyce, 2002；川上, 2002; Tamaoka, 2005）。また日本語の派生語については，言語学的研究やコーパス研究は数多く行われている（例えば，Ito, Sugioka & Hagiwara, 1996; Miyaoka & Tamaoka, 2005）。しかし，漢字のみで構成される漢語系派生語の認知過程についての研究については筆者が調べた限りでは行われていない。本研究では，このような特徴を持つ日本語の派生語を用いて，形態素への分解過程について検討する。

実験1

実験1では，二文字の漢字からなる自由形態素を語基とし，これに漢字一文字である接頭辞または接尾辞が付加した派生語を用い，派生語そのものの頻度（以下，派生語頻度）をコントロールしたときに，語基頻度（例えば，「運転」という語基に対して，安全運転，飲酒運転，運転手，運転免許，試運転・・・・など「運転」を含むすべての単語の累積出現頻度）の効果があるかどうかを検討した。

漢語系派生語においては，語基は自由形態素であり，それ自身が単語として機能する。従って語彙アクセス過程のいずれかの時点で語基を単位とした処理が行われると「単語である」という反応が生起し，このときに語基頻度が高い方が早く正確に反応が行われるという語基頻度効果が得られると考えられる。つまり語基頻度の効果が見られれば，語彙アクセス過程において，語基と接辞に分解されることが示唆されるということである。

本研究では，Taft (2004) や Myers, Huang and Wang (2006) の用いた単独で提示される刺激に対する語彙性判断課題を用いた。語彙性判断課題では，出現頻度が語彙アクセスの時間に影響するという仮説に基づき，プライミングなどの方法によらなくても，語基頻度効果を調べることができる。

方 法

要因計画　接辞の種類（接頭辞/接尾辞）×語基頻度（高/低）の被験者内二要因計画であった。

刺激材料　二文字漢字からなる語基に接頭辞または接尾辞を付加した三文字派生語を刺激とした。日本語の接辞の定義は様々であり，語基と接辞の組み合わせである派生語と，語基と語基の組み合わせである複合語の区別も判然としない（景山, 1993, p.13）。池原・宮崎・白井・横尾・中岩・小倉・大山・林 (1997, p.36) では，接辞を表1のように分類している。本論文では池原ら (1997) の「日本語語彙大系」に接辞として分類されているものを刺激として用いた。本論文で用いた接辞を表2に示す。

語基は二漢字からなり，天野・近藤 (2000) に普通名

表1　池原ら(1997)による接辞の分類

接頭辞	前置助数詞型	約，第，延べ，およそ
	否定型	無，不，非，未
	敬意添加型	御，ご，令，相
	純体言型	東，核，県，女
	連体詞型	各，全，同，本，元
	形容詞型	大，新，高，軽，快
	副詞型	再，最，既，仮，直
	動詞型	超，反，脱，対，過
接尾辞	助数詞型	回，毎，強，弱
	助数詞承接型	以上，以下，未満
	純体言型	さ，み，たち，者，機
	サ変動詞型	化，視
	形容動詞型	的，げ
	連体詞型	性，風，用，型，式
	副詞型	前，後，間，中，上
	動詞型	がる，めく，づく，ばる
	形容詞型	たらし，(っ)ぽい，めかし

表2　実験1～3で用いた接辞

接頭辞	新，再，好，不，短，無，小，急，低，非，副，大，長，高，悪，上，総，超，貴，初，旧，未
接尾辞	化，員，性，人，社，書，日，者，状，家，局，品，法，会，師，物，力，団，所，派，回，館，業，区，権，制，生，点，論，式，製，戦，台

詞として掲載されているものから選択した。接辞の種類(接頭辞/接尾辞)×語基頻度(高/低)の被験者内二要因計画で刺激を設計し，接頭辞付き派生語を26語(以下，接頭条件)，接尾辞付き派生語(以下，接尾条件)を40語選出した。それぞれ半数は語基頻度(天野・近藤(2000)による14年間の全体出現頻度[4])が高，半数は低とした。実験1では，派生語頻度は比較的低く設定した。刺激例と条件別の平均出現頻度を表3に示す。

また実在する語基と接辞を組み合わせることによって66個の擬似派生語(例：理解家)も作成した。うち26個は接頭辞と語基の組み合わせであり40個は接尾辞と語基を組み合わせたものであった。擬似派生語を構成する語基頻度は，接頭・高(例：旧融資)47339.3，接頭・低(例：旧暗転)1849.9[5]，接尾・高(例：理解家)46379.9，接尾・低(例：想起家)382.2であった。

表3　実験1 派生語刺激における平均派生語頻度と平均語基頻度および刺激例

接辞	接頭		接尾	
語基頻度	高	低	高	低
派生語	274	258	325	284
語基	56147	979	62130	740
例	未確認	不適格	努力家	分岐点

被験者　日本語を母語とする大学生・大学院生18名(男9名，女9名)が参加した。

装置　Windows PC(FMV-C610, FUJITSU社)上で動作する実験用ソフトSuper Lab(Cedrus社)とresponse pad(RB-530, Cedrus社)を用いて刺激提示をコントロールした。刺激は，CRTディスプレイ(RDF173H, Mitsubishi社)に提示した。

手続き　教示と10試行の練習試行を行った後，本実験132試行を行った。132試行の半数では派生語が提示され，半数では擬似派生語が提示された。課題は語彙性判断課題であり，被験者は提示される文字列が，実在する単語かそうでないかを判断することを求められた。以下，派生語が提示され「単語である」とする反応が正答である試行を「単語試行」，擬似派生語が提示され「単語でない」とする反応が正答である試行を「非単語試行」と呼ぶ。刺激の語彙性(派生語/擬似派生語)，接辞(接頭辞/接尾辞)，語基頻度(高/低)の条件は，すべて被験者ごとにランダム化されて提示された。

刺激文字列は文字を水平に並べることで構成され，CRT上の白い背景に黒文字で，一文字32ポイントの"MSPゴシック"フォントで提示された。視距離約60cmで，横三文字が視角約2.6度，縦が視角約0.9度であった。

一試行は次のような構成であった。まず凝視点(＊)が1秒間提示され，250msecのブランクインターバルの後，三文字の漢字からなる刺激が提示された。被験者は刺激が実在する日本語の単語か否かを判断してキー押しで反応した。単語と判断したら右手で，単語ではないと判断したら左手でキーを押した。刺激はキー押しと同時に消え，500msecのインターバルをおいて，自動的に次

の試行が開始された。

練習試行の前に，刺激はすべて三文字の漢字からなること，単語である場合と単語でない場合は確率的には半々であること，あまり難しい単語は提示されないので自分だけが知らないのではないかと考える必要はないこと，出来るだけ早く出来るだけ正確に反応することを教示した。

本試行では，刺激の語彙性（派生語/擬似派生語），接辞（接頭辞/接尾辞），語基頻度（高/低）のすべての条件が被験者ごとにランダム化された132試行を，33試行ごとの4つのサブセットに分けて，サブセット間に短い休憩を入れて行った。サブセットを行う順番は，被験者間でカウンターバランスされた。総実験時間は約15分であった。

結 果

各被験者について全試行の反応時間の平均値と標準偏差（*SD*）を求め，3 *SD*から外れる試行は以降の分析から削除した。削除された試行は全体の1.3％であった。

語彙性判断課題を用いた実験では，単語試行における正答反応のみを分析の対象とすることがほとんどである。しかし本研究では擬似派生語においても語基頻度と接辞種類を操作しているので，非単語試行における擬似派生語に対する正答反応（単語でないとする反応）についても分析を試みる。なお語彙性判断課題における派生語に対しての肯定反応と，擬似派生語に対してのリジェクト反応には異なる過程が含まれていると考えられるので，単語試行と非単語試行は別々に分析する。いずれも被験者をランダム変数とする分析（*Fs*）と刺激項目をランダム変数とする分析（*Fi*）を行った[6]。以下，表に示す平均値はすべて被験者をランダム変数としたものである。

単語試行　平均反応時間と平均誤答率を表4に示す。派生語に対して正しく肯定反応した試行の平均反応時間について，語基頻度（高/低）×接辞（接頭/接尾）の二要因分散分析の結果，語基頻度の主効果が有意であり［$Fs(1,17)=33.43$, $p<.001$; $Fi(1,62)=16.66$, $p<.001$］，語基が高頻度の方が語彙性判断課題が早く行われることが示された。接辞の主効果［$Fs(1,17)<1$; $Fi(1,62)<1$］及び交互作用［$Fs(1,17)=1.03$, *ns*; $Fi(1,62)<1$］は有意ではなかった。

表4　実験1　単語試行における平均反応時間 (msec, ( )内は標準偏差)，平均誤答率(%)

接辞	接頭		接尾	
語基頻度	高	低	高	低
反応時間	533	581	537	571
	(83.0)	(82.7)	(62.5)	(71.4)
誤答率	16.0	25.3	12.9	21.7

誤答率についても同様の分析を行った。語基頻度の主効果は被験者をランダム変数とした場合には有意であったが［$Fs(1,17)=6.67$, $p<.05$］，刺激項目をランダム変数とした分析では有意には至らなかった［$Fi(1,62)=3.55$, $p=.064$］。全体に誤答率が高く，特に語基頻度が低い場合に誤答が多かった。接辞の主効果［$Fs(1,17)=1.08$, *ns*; $Fi(1,62)<1$］，及び交互作用［$Fs(1,17)<1$; $Fi(1,62)<1$］は有意ではなかった。

非単語試行　平均反応時間と平均誤答率を表5に示す。擬似派生語に対して正しく反応した試行の平均反応時間について語基頻度（高/低）×接辞（接頭/接尾）の二要因分散分析の結果，語基頻度の主効果が有意であった［$Fs(1,17)=14.45$, $p<.001$; $Fi(1,62)=4.32$, $p<.05$］。派生語への反応とは逆で，語基頻度が低い場合に「単語でない」と反応するのが早かった。交互作用は*Fs*でのみ有意であった［$Fs(1,17)=10.47$, $p<.005$; $Fi(1,62)=1.88$, *ns*］。接辞の主効果は有意ではなかった［$Fs(1,17)<1$; $Fi(1,62)<1$;］。

表5　実験1　非単語試行における平均反応時間 (msec, ( )内は標準偏差)，平均誤答率(%)

接辞	接頭		接尾	
語基頻度	高	低	高	低
反応時間	618	603	633	587
	(100.2)	(104.8)	(124.4)	(102.5)
誤答率	20.6	11.5	37.3	26.5

誤答率については，接辞の主効果［$Fs(1,17)=29.47$, $p<.001$; $Fi(1,62)=6.15$, $p<.05$］，語基頻度の主効果［$Fs(1,17)=5.47$, $p<.05$; $Fi(1,62)=8.47$, $p<.005$］ともに有意であった。交互作用は有意ではなかった［$Fs(1,17)<1$; $Fi(1,62)<1$］。誤答は非常に多く，語基頻度が高いときに誤答が多かった。また接尾条件で誤答が多かった。

考　察

単独で提示される派生語への語彙性判断において語基頻度の効果が見られた。すなわち語基頻度が高いと語彙性判断が早かった。これは，派生語の語彙アクセス過程において，語基と接辞への分解が行われており，語基の処理結果が反応時間に影響しているというTaft (2004) やLongtin & Meunier (2005) などの仮説を支持するものと考えられる。

また，擬似派生語の判断においても語基頻度の効果が見られ，語基頻度が低いほど語でないという否定反応が早かった。擬似派生語においても，語基部分と接辞部分への分解が行われることによると考えられる。漢語系派生語の場合，語基は自由形態素であり，単独で単語として機能する。従って語基が活性化することによって，「単語」であるという肯定反応が生起するが，語基頻度が高いと肯定反応と「単語でない」という否定反応との競合が強くなると考えられる。

擬似派生語の誤答率でも語基頻度の効果が見られ，頻度が高いほど誤答が多くなっている。これも分解処理の結果，語基を単位として活性化が生じ，その結果肯定反応が生じることによると考えられる。また擬似派生語の誤答率では接辞の効果も見られ，語基と接尾辞を組み合わせた擬似派生語で特に誤答が多いことが特徴的である。これは従来から言われているように（例：Taft & Forster, 1975, 1976），合成語の認知において左から右への順で分析的に処理されていることによると考えられる。すなわち語基＋接尾辞の場合には，左から処理していくと語基が先に発見される。そして，語基を単位とした処理の結果，「単語」反応が生じ，誤答が多くなると考えられる。

しかしこの考え方が正しければ，反応時間においても接辞の効果が生じるはずであるが，実験1では得られなかった。一つの可能性として，実験1では派生語頻度を低く設定したことがあげられる。全体として派生語頻度が低く被験者にとって親近性の低い語であるために，語基と接辞を組み合わせて最終的に反応に至るまでにコストがかかってしまい，接辞の効果が薄められた可能性がある。また全体に誤答率が非常に高いことも問題である。このことから実験2では派生語頻度を高くして，実験1の知見が再現するかどうかを確かめる。

実験2

方　法

要因計画・刺激材料　実験1と同様のデザインで，派生語刺激として接頭条件，接尾条件ともに40刺激作成した。表6に示すように派生語頻度が実験1よりも高い刺激を選定した。結果として，語基頻度も全体として高くなった。擬似派生語も，実験1同様に，接頭辞と語基を組み合わせたもの40刺激，語基と接尾辞を組み合わせたものを40刺激作成した。擬似派生語における語基頻度は，接頭・高（例：不航空）49636.9，接頭・低（例：細原子）2707.3，接尾・高（例：被害内）49140.7，接尾・低（例：祝賀気）2674.9であった。

表6　実験2　派生語刺激における平均派生語頻度と平均語基頻度および刺激例

接辞	接頭		接尾	
語基頻度	高	低	高	低
派生語	2171	2019	2062	2084
語基	47528	7140	47893	6780
例	低金利	貴金属	映画化	主流派

被験者　大学生・大学院生14名（男5名，女9名）が参加した。

装置・手続き　実験1と同様であった。ただし全試行数は160試行であり，40試行ごとに短い休憩を入れて4

つのサブセットを行った。総実験時間は約20分であった。

結 果

被験者ごとに全試行の反応時間の平均値と標準偏差(*SD*)を求め，3*SD*から外れる試行は以降の分析から削除した。削除された試行は，全体の1.3％であった。

次に刺激ごとの正答率を算出したところ，接頭・低頻度条件の1単語の正答率が極端に低かったため(14名中1名のみ正答)，この単語(小法廷)を以降の分析から削除した。また擬似派生語として提示したもののうち，単語として使用されることがあり，被験者全員が単語と反応した1刺激(開発化)も以降の分析から削除した。実験1と同様，被験者をランダム変数とする分析(*Fs*)と刺激項目をランダム変数とする分析(*Fi*)を行った。

単語試行 平均反応時間と平均誤答率を表7に示す。単語に対する正反応の平均反応時間について語基頻度(高/低)×接辞(接頭/接尾)の二要因分散分析の結果，語基頻度の主効果［$Fs(1,13)=13.13$, $p<.005$; $Fi(1,75)=5.13$, $p<.05$］，接辞の主効果［$Fs(1,13)=16.54$, $p<.005$; $Fi(1,75)=3.91$, $p=.052$］が有意であった(*Fi*では傾向)。交互作用は有意ではなかった［$Fs(1,13)<1$; $Fi(1,75)<1$］。実験1と同様，語基頻度の効果が有意であり，語基頻度が高い方が語彙性判断が早いことが示された。また実験2では，接辞の効果も有意になった。つまり接尾条件の方が接頭条件よりも反応が早かった。

誤答率については，語基頻度の主効果が有意であった［$Fs(1,13)=12.26$, $p<.005$; $Fi(1,75)=3.74$, $p=.057$］(*Fi*では傾向)。接辞の主効果は，*Fs*分析は有意［$Fs(1,13)=10.74$, $p<.01$］，*Fi*分析では有意ではなかった［$Fs(1,75)=2.67$, *ns*)。交互作用は有意ではなかった［$Fs(1,13)<1$; $Fi(1,75)<1$］。

非単語試行 平均反応時間と平均誤答率を表8に示す。反応時間について語基頻度(高/低)×接辞(接頭/接尾)の二要因分散分析の結果，接辞の主効果が有意であった［$Fs(1,13)=8.02$, $p<.05$; $Fi(1,75)=15.29$, $p<.001$］。語基頻度の効果は有意ではなかった［$Fs(1,13)=1.51$, *ns*; $Fi(1,75)=1.81$, *ns*］。また接辞×語基頻度の交互作用が有意であった［$Fs(1,13)=5.22$, $p<.05$; $Fi(1,75)=4.10$, $p<.05$］。単純主効果の検定の結果，接尾条件では頻度の効果が有意ではなかったが［$Fs(1,13)<1$］，接頭条件では有意であった［$Fs(1,13)=6.23$, $p<.05$］。

誤答率は，接辞の主効果が有意であった［$Fs(1,13)=35.81$, $p<.001$; $Fi(1,75)=22.31$, $p<.001$］。また接辞×語基頻度の交互作用が有意であった［$Fs(1,13)=15.51$, $p<.005$; $Fi(1,75)=7.68$, $p<.01$］。語基頻度の効果は有意ではなかった［$Fs(1,13)=1.63$, *ns*; $Fi(1,75)=1.05$, *ns*］。

表7 実験2 単語試行における平均反応時間 (msec, ( )内は標準偏差)，平均誤答率(%)

接辞	接頭		接尾	
語基頻度	高	低	高	低
反応時間	546	566	520	549
	(70.2)	(79.5)	(58.7)	(82.6)
誤答率	11.8	17.5	6.4	14.0

表8 実験2 非単語試行における平均反応時間 (msec, ( )内は標準偏差)，平均誤答率(%)

接辞	接頭		接尾	
語基頻度	高	低	高	低
反応時間	627	600	638	645
	(63.3)	(67.4)	(87.7)	(101.1)
誤答率	19.9	6.2	27.3	34.3

考 察

実験2においても語基頻度の効果が得られ，派生語の認知において接辞と語基への分解処理が行われていることが示された。また，実験1よりも派生語頻度を高くした結果，単語試行における接辞の効果も有意となった。つまり接頭辞付き派生語よりも接尾辞付き派生語の方が語彙アクセスが早く行われた。

一方，実験1では非単語試行で頻度の効果が有意であったのに対し，実験2では接辞の効果と交互作用は有意であったが語基頻度の効果は有意ではなかった。これは

接尾条件においては語基頻度の効果が有意ではなく，接頭条件においてのみ有意であったことによる。

接辞による差は，以下のような左から右への分析的処理，形態素への分解，語基を単位とした語彙アクセスと，語基と接辞の組み合わせ処理によって説明することができる。すなわち，語彙アクセスの初期段階において左から右への分析的処理が行われると考える。この場合，接尾辞付き派生語ではまず語基が発見され，その後接尾辞が発見される。このため語基を単位とした処理が行われ，そしてその後，語基と接尾辞を組み合わせる処理をスムーズに行うことが出来る。これに対して接頭辞付き派生語では，接頭辞をスキップして，語基の処理をしなくてはならない。アルファベット系言語を用いた多くの先行研究では，接頭辞付きの単語で，接頭辞が切り離され(prefix stripping)，処理がスキップされることによって語基をユニットとした語彙アクセスが行われることが示されている(詳しくは，Taft(1991)などに解説されている)。本実験においても，刺激として用いた多くの接頭辞は接頭辞として以外はほとんど使用されることがないために，最初の一文字で区切ることにより容易に課題を行うことができる。しかし実験の結果，接頭条件の反応は遅く，接頭辞付き派生語の処理において必ずしも最初の一文字で区切ることに成功していないのではないかと思われる。それではどのような処理が行われているのであろうか。

日本語においては，接頭辞に比べると接尾辞の方が種類が多く，接頭辞付き派生語よりも接尾辞付き派生語が使用される頻度が高い。従って日常の読みにおいて，二文字＋一文字という分解を頻繁に行うことになる。このため，まず左から二文字で区切ろうとする「二文字目区切りの優位性」が存在するのではないだろか。そして最初の二文字を単位とした処理の結果「単語ではない」と判断し，その後一文字目で区切り直して，後ろの二文字が「単語」であると判断するという再検証(rechecking)が行われるのではないだろうか。このような場合には判断に時間がかかり，また誤答も多くなる。

実験2の結果は，以上のように派生語の分解処理と左から右への処理という枠組みで説明することができる。ここで問題として残るのが，実験1，実験2では非単語試行の刺激がすべて擬似派生語であったという点である。被験者の中で刺激が派生語であることや擬似派生語が提示されていることに気づいたと報告した人はいなかった。しかし，無意識のうちに一文字目または二文字目の区切りに注意を向けるという方略を用いていた可能性が否定できない。そこで実験3では，単語試行には派生語ではない漢字三文字熟語を加え，非単語試行には擬似派生語以外の漢字文字列を加えて，実験2の結果が再現するかどうかを確認する。

実験3

方　法

要因計画・刺激材料　単語試行では，接辞(接尾辞/接頭辞)×語基累積頻度(高/低)の二要因計画で，実験2と同じ80単語を用いた。これに加えてダミー単語として三文字単語(例：多数決，雰囲気)を20語用いた。ダミー単語の多くは漢字一文字と二文字単語に区切ることは出来るが，接辞は含んでいない。また一文字と二文字には区切れない単語(例：歌舞伎)も含んでいた。ダミー単語の出現頻度はコントロールしていない。単語刺激は合計100語であった。

非単語試行では，実験2と同様の基準で，接辞(接頭/接尾)×語基頻度(高/低)の条件それぞれ10刺激，計40刺激を用いた。またダミー刺激として，漢字三文字をランダムに組み合わせた非単語を20刺激(例：福麦在)，二文字単語の後ろに接尾辞でない漢字を組み合わせた擬似単語(例：理解賃)を20刺激，二文字単語の前に接頭辞でない漢字を組み合わせた擬似単語(例：族工事)を20刺激作成して用いた。非単語試行の刺激数は合計100語であった。

装置・手続き　実験2と同様であった。ただし全試行数は200試行であった。休憩を挟んで50試行ずつの4つのサブセットを行い，総実験時間は約25分であった。

被験者 大学生，大学院生17名(男6名，女11名)が参加した。

結果と考察

被験者ごとに全試行の反応時間の平均値と標準偏差(*SD*)を求め，3*SD*から外れる試行と1200msecより長い試行を削除した。削除したデータは全体の1.6％であった。

まず刺激ごとの正答率を求めた。その結果，実験2と同じく，単語「小法廷」は，17名中1名しか正答していないので以降の分析から削除した。

実験1，2と同様，被験者をランダム変数とする分析(*Fs*)と刺激項目をランダム変数とする分析(*Fi*)を行った。ダミー刺激は分析の対象とはしなかった。

単語試行 平均反応時間と平均誤答率を表9に示す。単語に対する正反応の平均反応時間について語基頻度(高/低)×接辞(接頭/接尾)の二要因分散分析の結果，語基頻度の主効果［$Fs(1,16)=19.72$, $p<.001$; $Fi(1,75)=4.81$, $p<.05$］，接辞の主効果［$Fs(1,16)=26.12$, $p<.001$; $Fi(1,75)=4.40$, $p<.05$］が有意であった。交互作用は有意ではなかった［$Fs(1,16)=2.61$, *ns*; $Fi(1,75)<1$］。実験2同様，語基頻度が高い語の方が低い語よりも，また接頭条件よりも接尾条件で，語彙性判断課題が早く行われた。

表9 実験3 単語試行における平均反応時間 (msec, ( )内は標準偏差)，平均誤答率(%)

接辞	接頭		接尾	
語基頻度	高	低	高	低
反応時間	556	591	537	557
	(61.3)	(74.3)	(57.7)	(63.4)
誤答率	5.7	8.8	2.0	9.2

誤答率については，語基頻度の主効果［$Fs(1,16)=3.74$, *ns*; $Fi(1,75)=1.69$, *ns*］，接辞の主効果［$Fs(1,16)<1$; $Fi(1,75)=2.94$, *ns*］，交互作用［$Fs(1,16)<1$; $Fi(1,75)<1$］ともに有意ではなかった。

非単語試行 平均反応時間と平均誤答率を表10に示す。

表10 実験3 非単語試行における平均反応時間 (msec, ( )内は標準偏差)，平均誤答率(%)

接辞	接頭		接尾	
語基頻度	高	低	高	低
反応時間	673	630	712	736
	(74.8)	(67.6)	(77.2)	(106.3)
誤答率	10.5	6.1	25.3	23.0

平均反応時間について語基頻度(高/低)×接辞(接頭/接尾)の二要因分散分析の結果，接辞の主効果が有意であった［$Fs(1,16)=36.85$, $p<.001$; $Fi(1,36)=23.44$, $p<.001$］。語基頻度の効果は有意ではなかった［$Fs(1,16)=1.20$, *ns*; $Fi(1,36)<1$］。交互作用は有意であった［$Fs(1,16)=16.2$, $p<.01$; $Fi(1,36)=5.32$, $p<.05$］。単純主効果を検定したところ，接頭条件では頻度の効果が見られたが［$Fs(1,16)=17.34$, $p<.001$］，接尾条件では頻度の効果が見られなかった［$Fs(1,16)=3.19$, *ns*］。これらの結果も，実験2を再現したものであった。

誤答率は，接辞の主効果のみ有意であった［$Fs(1,16)=25.00$, $p<.001$; $Fi(1,36)=10.71$, $p<.01$］。語基頻度の主効果［$Fs(1,16)<1$; $Fi(1,36)<1$］，交互作用［$Fs(1,16)<1$; $Fi(1,36)<1$］は有意ではなかった。

実験3では，刺激に派生語以外の単語，擬似派生語以外の非単語を加えて実験1，2の結果を検証した。単語試行の結果は実験2と同様であり，語基頻度の効果，接辞の効果が見られた。すなわち接尾辞付き派生語の方が接頭辞付き派生語よりも早く処理されることが明らかになった。語基頻度の効果は実験1から一貫して見られており，強固な知見と考えられる。

実験3では，二文字(語基)と一文字には区切れない刺激を含み，また二文字(語基)と一文字の組み合わせからなる刺激も語基の前後に一文字がつくので，常に最初の二文字のみに注目していたのでは正答できない。また実験後に，被験者の中に特にどこかに注目していたと報告した人はいなかった。従って，本研究で得られた語基頻度の効果，接辞の効果は，被験者の方略によるものではないと考えられる。

総合論議

本研究では，漢字三文字からなる派生語を用いて，合成語の語彙アクセス過程を調べる三つの実験を行った。いずれの実験も，派生語頻度を一定として語基頻度を操作し，語彙アクセス過程において語基頻度が効果を持つかどうかを調べた。実験１では，派生語頻度，語基頻度ともに低い刺激を用いた。実験２，３では派生語頻度，語基頻度ともに実験１よりも高い刺激を用いた。

いずれの実験でも一貫して語基頻度の効果が認められた。これはすなわち，語彙アクセスにおいて語基を単位とした処理が行われていることを示しており，派生語が接辞と語基に分解されることが示唆された。また派生語頻度と語基頻度が比較的低い場合（実験１）では接辞条件による差はなかったが，高頻度の場合（実験２，３）には接尾条件の方が接頭辞条件に比べて反応が早いことが明らかになった。これは派生語頻度を高くすることに伴い，語基の頻度も高くなっていることによると考えられる。すなわち，接辞の効果は接尾条件において語基の処理が速く行われることに起因するが，語基頻度が低い場合にはこの効果が曖昧であり，頻度が高くなると頻度の効果が明らかになると考えられる。

語基頻度の効果，接辞の効果ともに，派生語認知において語基を単位とした処理が行われることを示唆するものであると考えられる。本研究では漢語系派生語に関する探索的な実験を行っており，モデルの検討を目的としたものではないが，既存のモデル（Joyce, 2002；Taft, 1994）の枠組みを支持するものと考えられる。すなわち派生語の処理は，入力された刺激の左から右への処理，区切りの発見，形態素への分解，形態素レベルの活性化，lemmaレベルの活性化，語基と派生語の組み合わせによる意味・概念の理解，というようないくつかの階層が仮定できる。本研究では，このうち初期の左から右への処理と形態素への分解が，日本語の派生語処理においても行われることを示した。日本語の漢語系派生語の場合，語基は基本的に自由形態素であり，それ自体が単語として機能するため，語基を単位とした活性化が一定レベルに達すると「単語」であるという肯定反応が生起する。このときに語基の頻度効果が生じる。

また左から右への処理の際に，接尾辞付き派生語の方が接頭辞付き派生語よりも早く語基が発見される。語基が発見された時点で語基を単位とした活性化が開始されるので，接尾辞付き派生語の方が接頭辞付き派生語よりも反応が早い，すなわち接辞の効果が生じる。

非単語試行において，接尾辞付きの擬似派生語で反応が遅く，また誤答率が非常に高いことも次のように説明できる。接尾辞付き擬似派生語では，左から処理していき先に語基が発見されると語基を単位とした活性化が生じる。続いて接尾の処理が行われ，その後組み合わせ処理が行われる。組み合わせの段階では既に語基が十分に活性化されているので，「単語」反応が生じやすく誤答が多い。また組み合わせ処理の結果の非単語反応と語基からの「単語」反応が競合し，反応に時間がかかる。これに対して接頭辞付き擬似派生語では，接頭辞の区切りを見つけてから語基が発見されるために接尾辞付き擬似派生語に比べると語基の活性化が始まるのが遅く，反応段階における活性化が比較的低い。このため反応競合が起こりにくく，接尾辞付き擬似派生語よりも反応が早くなるのではないかと思われる。

要約すれば，漢字三文字からなる派生語の語彙アクセス過程を調べた結果，一貫して語基頻度の効果が見られ，形態素への分解処理が行われることが示された。また接辞の効果も見られ，左からの右への処理，左から二文字目での区切りの優位性が示された。今後の課題としては，区切り位置の優位性を確認するために，刺激文字数の種類を増やす，あるいは文字数を条件に加えた実験も行う必要があると考えている。

資料

実験1で用いた派生語刺激激

接辞	接頭		接尾	
語基頻度	高	低	高	低
	初仕事	超新星	努力家	愛犬家
	旧体制	超音速	銀行家	武道館
	旧制度	低周波	事業家	参政権
	大家族	未成年	最終回	始業式
	不景気	高画質	予想外	除幕式
	未処理	大司教	写真館	洗面所
	未確認	大好物	自由業	教習所
	未解決	大往生	行政区	合議制
	総予算	不手際	教育権	門下生
	新勢力	小細工	営業権	下級生
	再投票	旧石器	発言権	自家製
	再生産	不本意	経営権	持久戦
	再教育	不適格	議会制	争奪戦
			通信制	聖火台
			研究生	分岐点
			最高点	小数点
			平均点	消耗品
			輸出品	貴重品
			対象物	浮遊物
			方法論	抽象論

実験1で用いた擬似派生語刺激激

接辞	接頭		接尾	
語基頻度	高	低	高	低
	旧融資	旧暗転	理解家	想起家
	高被告	高紙片	意味回	抜粋家
	再景気	初世俗	市民外	単体回
	初本部	小質感	負担業	浮動回
	小与党	総滑空	出席区	転任館
	新事故	総写生	作品区	特長区
	総削減	大簡素	関連権	本意権
	大民間	大感嘆	患者式	当座式
	超捜査	超唱歌	時期制	認否所
	低目標	超供出	法案生	波形制
	不平和	低警視	援助生	風車生
	不海外	不精鋭	指導製	流失製
	未人間	未戦局	目標製	別格台
			担当戦	調合点
			住民台	白票品
			家族点	労苦物
			写真品	滞留面
			解決物	余生面
			相手面	明細論
			映画所	併願戦

実験2，3で用いた派生語刺激激

接辞	接頭		接尾	
語基頻度	高	低	高	低
	新記録	高血圧	映画化	講習会
	再評価	最前線	指導員	薬剤師
	好景気	悪循環	人間性	建造物
	不自由	高性能	文化人	創業者
	短期間	不信任	制度化	抑止力
	新体制	大震災	管理者	通行人
	無投票	再構築	専門店	合唱団
	小規模	最先端	契約書	入居者
	副知事	上半期	商品化	診療所
	無条件	不透明	記念日	保育所
	急成長	副作用	保護者	財界人
	低金利	副都心	通信社	主流派
	非公開	大相撲	逮捕状	後継者
	再確認	総辞職	写真家	後援会
	副議長	不公平	放送局	証明書
	不安定	超党派	弁護人	食料品
	大部分	小法廷	輸入品	少数派
	再検討	不公正	基本法	効率化
	長時間	貴金属	作業員	有効性
	無関心	不均衡	経験者	実力者

実験2で用いた擬似派生語刺激

接辞	接頭		接尾	
語基頻度	高	低	高	低
	不航空	細原子	被害内	祝賀気
	高憲法	貴合法	軍事気	実業感
	悪使用	不物理	新聞品	深刻派
	再理事	新衣料	総裁然	間接者
	不議会	半生態	共同力	勤労式
	迷利益	好町内	住宅面	公務品
	逆候補	平自衛	民間団	週刊人
	最投資	短製鉄	報道気	著作派
	上生産	他相続	取引化	評論所
	軽大学	上工学	予算人	取締性
	短経営	小監査	技術店	方面者
	副支持	副郵便	教授社	拘置化
	純機関	急表彰	担当状	総理員
	上責任	無作曲	報告家	気象性
	不協議	低体育	選手局	教科団
	細生活	非発電	社会物	商店式
	大情報	迷貯金	開発化	漫画野
	再世界	空世話	必要野	執行店
	好審議	真近代	会議論	懇談書
	無政治	粗多様	中心状	平等内

実験3で用いた擬似派生語刺激

接辞	接頭		接尾	
語基頻度	高	低	高	低
	不航空	細原子	被害内	祝賀気
	高憲法	貴合法	軍事気	実業感
	悪使用	不物理	新聞品	深刻派
	真理事	新衣料	総裁然	間接者
	不議会	半生態	共同力	勤労力
	空利益	好町内	住宅面	公務品
	逆候補	平自衛	民間団	週刊人
	最投資	短製鉄	報道用	著作派
	上人事	他相続	取引化	評論所
	軽大学	非工学	予算人	取締性

実験3の単語試行

ダミー刺激
似顔絵
歌舞伎
雰囲気
白血球
多数決
非常勤
冷蔵庫
神経質
報道陣
試金石
気象台
遊園地
脳卒中
防波堤
地下鉄
中近東
食中毒
私書箱
河川敷
紙芝居

実験3の非単語試行

ダミー刺激				
福麦在	被害内	利益垂	不航空	候格差
静解毎	軍事気	行動画	高憲法	券安全
柱肉呼	新聞品	転換表	悪使用	機場面
開官件	総裁然	連合節	真理事	酸動向
能根穀	共同力	事業林	不議会	拝福祉
供規左	住宅面	比率夢	空利益	仲患者
松五息	民間団	理解賃	逆候補	庭予想
栄粉出	報道用	登録争	最投資	来午後
均復負	取引化	国内暑	上人事	夫平均
車講揮	予算人	基盤母	軽大学	功当時
照群糖	祝賀気	再建蔵	細原子	雑人口
半専泳	実業感	常務粉	貴合法	敗場合
築温興	深刻派	野党後	不物理	目路線
史縦百	間接者	外国続	新衣料	族工事
寒示至	勤労力	充実己	半生態	敵現職
移針丸	公務品	主催村	好町内	博姿勢
鉄策悪	週刊人	勧告毒	平自衛	減目標
期貴東	著作派	大手胸	短製鉄	軽時点
点以口	評論所	連続半	他相続	個年間
郷走問	取締性	方向適	非工学	徳合同

注

1) 景山(1993)は，基体と表記している。

2) 英語学用語辞典(荒木編，1999)によれば，語根(root)とは，語からすべての派生接辞および屈折接辞を取り除いて残る語の中核部分であり，語幹(base)とは，派生語接辞添加の作用を受ける要素とされる。Longtin and Meunier(2005)での語根と，本研究における語基とは，派生語の場合ではほぼ同じものを指すと考えられる。

3) 日本語の場合も，"word"に対応する用語として，「単語」という表記で統一した。

4) ある単語が1985年から1998年までの14年間に朝日新聞紙上に出現する頻度。

5) 接頭・低条件の1刺激のみ，比較的高頻度のものが含まれていたため，平均値が高くなっている。1刺激を除くと平均は469.5となる。結果はこの1刺激を除いても同じであった。

6) 言語を刺激材料とする実験の場合，被験者をランダム変数とした分析に加えて，用いた刺激を言語刺激という母集団から抽出された標本と考えて，刺激項目をランダム変数とした分析が行われることが多い。詳しくは郡司・坂本(1999，p.188)など。

文　献

天野成昭・近藤公久(2000).『NTTデータベースシリーズ　日本語の語彙特性』三省堂.

荒木一雄編(1999).『英語学用語辞典』三省堂.

郡司隆男・坂本勉(1999).『言語学の方法』岩波書店.

池原悟・宮崎正弘・白井諭・横尾昭男・中岩浩巳・小倉健太郎・大山芳史・林良彦(編)(1997).『日本語語彙大系』岩波書店.

ITO, T., SUGIOKA., Y, & HAGIWARA, H. (1996). Psychological status of rules in derivational morphology: Evidence from Japanese nominal suffixation. *Metropolitan Linguistics*, **16**, 10-40.

JOYCE, T. (2002). Constituent-morpheme priming: Implications from the morphology of two-kanji compound words. *Japanese Psychological Research*, **44** (2), 79-90.

景山太郎(1993).『文法と語構成』ひつじ書房.

川上正浩 (2002). 漢字二字熟語の類似語数と構成文字の出現頻度が語彙判断課題に及ぼす効果. 心理学研究, **73**, 346-351.

LONGTIN, C, M., & MEUNIER, F. (2005). Morphological decomposition in early visual word processing. *Journal of Memory and Language*, **53** (1), 26-41.

MIYAOKA, Y., & TAMAOKA, K. (2005). A Corpus Investigation of the Right-hand Head Rule Applied to Japanese Affixes, *Glottometrics*, **10**, 45-54.

MYERS, J., HUANG, Y., & WANG, W. (2006). Frequency effects in the processing of Chinese inflection. *Journal of Memory and Language*, **54** (3), 300-323.

TAFT, M. (1991). *Reading and the mental lexicon*. London: Lawrence Erlbaum Associates.

TAFT, M. (1994). Interactive-activation as a framework for understanding morphological processing. *Language and Cognitive Processes*, **9** (3), 271-294.

TAFT, M. (2004). Morphological decomposition and the reverse base frequency effect. *Quarterly Journal of Experimental Psychology: Human Experimental Psychology*, **57A** (4), 45-765.

TAFT, M., & FORSTER, K.I. (1975). Lexical storage and retrieval of prefixed words. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, **14** (6), 638-647.

TAFT, M., & FORSTER, K.I. (1976). Lexical storage and retrieval of polymorphemic and polysyllabic words. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, **15** (6), 607-620.

TAMAOKA, K. (2005). The effect of morphemic homophony on the processing of Japanese two-kanji compound words. *Reading and Writing*, **18** (4), 281-302

玉岡賀津雄・初塚眞喜子 (1995). 漢字二字熟語の処理における漢字使用頻度の影響. 読書科学, **39**, 121-137.

受付：2006. 8. 26
受理：2007. 5. 1

The Effects of Base Frequency and Affix Type in the Word Recognition of Japanese Derivational Words

NAKAYAMA, Michiko (Nara Women's University)

Abstract

In order to investigate the lexical access of morphologically complex words, three experiments are conduct with Japanese derivational words consisting of three kanji characters. The surface frequency of the derivational words is fixed, while base frequency is varied. In Experiment 1, both frequencies are low, while in Experiments 2 and 3, they are high. The effect of affix type (prefix or suffix) is also examined.

An effect of base frequency was observed, suggesting that base word is processed as a unit in lexical access. This finding suggests that derivational words are decomposed into the affix and the base word during processing. No significant differences due to affix type were observed in Experiment 1, where surface and base frequencies were relatively low. However, significant differences were observed in Experiments 2 and 3, where the frequencies were high, with reaction times in the suffix condition being consistently shorter than in the prefix condition.

These differences in reaction times indicate that processing is conducted from left-to-right during the early stage of lexical access and that word bases are processed as units. In the case of kanji derivational words, the base is basically a free morpheme and can function as a word on its own. Accordingly, when activation of a base unit reaches a certain level, a 'word' response would be made, giving rise to the base frequency effect. Moreover, within left-to-right processing, the base of a derivational word formed with a suffix would be found earlier than for a derivational word formed with a prefix. Once the base is identified, activation of the base unit would be initiated. Consequently, reaction times for derivational words with a suffix are faster than derivational words with a prefix. In the case of derivational words with a prefix, parsing tends to mistakenly occur at the second character rather than at the first one, and so the word must subsequently be re-parsing from the first character.

The base word was also activated after being detected in nonword trials. The base word is activated when it is detected during the left-to-right processing of a pseudo-derivational word with a suffix. Then, the suffix is processed and combined with the base. As the base word has already been sufficiently activated during the combination stage, 'word' responses tend to occur, which result in incorrect responses. Moreover, reaction times are longer because 'nonword' and 'word' responses compete with each other. In contrast, for pseudo-derivational words with a prefix, the prefix is parsed before the base is detected. Because activation of the base word begins later for words with a prefix than for words with a suffix, the activation of the base unit is relatively low during the response stage. Accordingly, there is less response competition and reaction times are shorter for words that have a prefix compared to those that do not.

In summary, this study investigates the lexical access of Japanese derivational words and demonstrates a base frequency effect and the morphological decomposition of morphologically complex words. The study also suggests that there is left-to-right processing during the early stage of lexical access and that there is a predominance for parsing at the second character.

The Science of Reading, Vol. 50, No.3・4 (2007)

交流ノートにおける「読者」から「作者」への移行
—水戸芸術館現代美術センター教育普及プログラム・高校生ウィーク2006「ちへい/cafe」における小学生の参加過程の分析—*

筑波大学大学院人間総合科学研究科　石　田　喜　美**

1．はじめに

本研究の目的は，メディア・テクストの「読者」(audience)[1]が，既存のメディア・テクストとの関わりの中から自分自身の物語を生成し，「作者」(producer)へと移行する過程を記述することである。そのために本研究では，水戸芸術館現代美術センター教育普及プログラム「高校生ウィーク」の一環として企画されたカフェ「ちへい/cafe」(2.2 参照)における，ある小学生の参加過程を分析する。特に本研究では，メディア・テクストをめぐる「読者」から「作者」への移行に焦点をあてるため，「ちへい/cafe」の中に設置されたワークショップ・コーナーの一つである交流ノート「楽書掲示板」コーナーで行われた相互行為の過程と，その結果として生じた参加形態の変容を記述する。

メディア・テクストの「読者」に関する議論は，主にカルチュラル・スタディーズを中心としたメディア論の中で議論されてきた。毛利(2003)は，これまでのメディア論の中で展開されてきた「読者」研究を整理し，今日の「読者」研究の方向性としてエスノグラフィー・アプローチによる「読者」研究を紹介するとともに，「読者」研究の今後の可能性として「読者」の生産性，すなわちメディア・テクストの「作者」としての「読者」に関する研究の重要性を示している。

メディア・テクストの「作者」としての「読者」に関する先行研究は主に二つの系譜に分類することができる。一つは，(1) 1970年代にレコードのプレス費用の低下やコピー機の普及を背景として生じた「DiY (Do it Yourself) 文化」(毛利，2003)の研究であり，もう一つは (2) ミシェル・ド・セルトー(1987)の「大衆的な読み」(popular reading)に関する理論を基盤として展開したメディア・ファン文化の研究(Jenkins, 1992; Storey, 2003)である。

このうち，(2)の系譜の研究は，メディア・テクストの「読者」であるファンやファンの集団に注目し，「読者」がメディア・テクストを読むという行為そのものに内在する，「作者」への契機を明らかにしてきた。メディア・ファン文化においては，ファンそれぞれが，自分自身の読みを交流するために「同人誌」(Fanzine)などの二次創作物を発行する。すなわち，主流のメディアの前では「読者」であったファンが，自分自身の「大衆的な読み」によって生成した新たな読みを交流するために「作者」へと移行する。このように (2)の系譜の研究は，主流のメディアによって流されるメディア・テクストの「読者」が，メディア・テクストを読むという行為の中で自分自身の物語を生成し，「作者」へと移行していく可能性を明らかにしてきた。

しかし，カルチュラル・スタディーズを理論的背景としたこれらの研究は，文化現象の記述にとどまり，実際に一人の人間が具体的にどのような過程を経て「読者」から「作者」へと移行するのかについては，ほとんど明

* Shift from 'audience' to 'producer': Analysis of interactive behavioral processes occurring with the 'Rakugaki-Keijiban' exchange notebook.

** ISHIDA, Kimi (University of Tsukuba)

らかにしていない。そこで本研究では，ある小学生が，周囲の人々や物など，環境との関わりの中で「読者」から「作者」へと移行する具体的な過程に焦点を当て，これを分析・記述する。

本山(2004)は，社会構成主義的学習論の立場から，子どもを見る人々による解釈や意味づけの中で生起する発達について記述している。子ども自身の環境との関わりの変容を発達として記述しようとするならば，子ども自身による行為の変容だけでなく，子どもにまなざしを向ける周囲の人々の解釈や意味づけの変容をも視野に置き，子どもの変容が「発達」「変容」として周囲の人々に意味づけられる過程を記述する必要がある。

そこで本研究では，エスノグラフィーのさまざまな手法の中でも特に，リフレクシブ・エスノグラフィーの手法(2.5 参照)を採用し，フィールドの中で子どもに関わる調査者自身の視点や，そのような調査者の視点による解釈や意味づけをも含めた上で，フィールドで得られたデータの分析・記述を行う。

2．方　法

2.1　調査方法

本研究では，エマーソン・フレッツ & ショウ(1998)によって紹介されたエスノグラフィーの手法を用い，水戸芸術館現代美術センター教育普及プログラム・高校生ウィーク2006「ちへい/cafe」(2.2 参照)の調査を行った。

2.2　フィールドの概要

本研究のフィールドは，水戸芸術館現代美術センターの教育普及プログラム「高校生ウィーク」の一環として企画・実施されたカフェ「ちへい/cafe」である。以下，「高校生ウィーク」の概要を示した樋口・山崎(2005)とフィールド・ノートに基づき，フィールドの概要を説明する。

1）水戸芸術館現代美術センターの概要

水戸芸術館は1990年に設立された複合芸術施設であり，美術・演劇・音楽の三部門から構成されている。本研究が対象とする現代美術センターは，美術部門にあたる機関である。現代美術センターでは，所蔵作品による常設展を主な目的とする通常の美術館とは異なり，自主企画の展覧会を行うことを主な目的としている。現代美術センターの自主企画による展覧会(以下，企画展)は年間4回行われており，「高校生ウィーク」はこれら企画展のいずれかが開催される期間中の1ヶ月間に実施される。

2）「高校生ウィーク」の概要

「高校生ウィーク」は水戸芸術館が設立された1993年に，高校生や高校生と同年代の青年を対象とした現代美術ギャラリーへの入場無料企画として開始した。最初の7年間は高校生を中心とした青年への現代美術の体験促進を主な目的としたプログラムが実施されていたが，2000年に行われたポスター制作企画(水戸市内の高校生と水戸芸術館のスタッフとで「高校生ウィーク」のポスターを制作する企画)を機に，来館者同士のコミュニケーションの促進を目的としたプログラムを展開してきている。このようなプログラムの展開の中で，2003年からはカフェが企画・実施され，さらに2004年からは高校生や大学生を中心としたボランティアによってカフェの運営が担われている。

3）カフェ「ちへい/cafe」の概要

本研究が調査を行ったのは，2006年(2006年3月15日から2006年4月16日)に開催された「高校生ウィーク2006」である。なお「高校生ウィーク2006」ではカフェ「ちへい/cafe」が企画・実施された。カフェ「ちへい/cafe」は，現代美術ギャラリー内に設置されたワークショップ・ルームを利用して，午後3時から6時まで開かれるカフェであり，サービスはすべて無料で提供される。図1は，カフェ会場の全体像を示したものである。

カフェ「ちへい/cafe」では，裁縫や工作などを来場者が自由に行うことができるワークショップ・コーナーなど「教える者」と「教えられる者」との反転が可能に

Workshop：「散歩」を通じて、自分なりの日常の切り口を発見する楽しみを紹介します。

ワークショップ1：■3月26日<日>16：00〜17：00（要電話申込、先着15名）■散歩の達人 住谷強生さん（街づくり100年委員会所属）によるオリエンテーション。

ワークショップ2：■4月1日<土>14：00〜16：30（要電話申込、先着15名）■K5 ARTWORKSHOPによる芸術館からでかけるサンポワークショップ■ワークショップ1、2とも参加費無料、ただし一般の方はギャラリー入場料が必要です。

Sawing:日々の針仕事
好きな材料で手芸ができます。（無料）

Plants:茨城県立水戸農業高等学校の生徒さんによる植物プロジェクト

ワークショップ1：「わら紙工」
■3月21日<火>■15：00〜18：00■参加費無料・申込不要■わら綯（な）い体験ができます。県立水戸農業高校のみなさんが参加者に手ほどきを行います。

ワークショップ2：「無農薬・有機農法ジャガイモオーナー募集！」■県立水戸農業高校の畑で生徒さんと一緒にジャガイモの植え付けと収穫を体験します。■植え付け日程：4月2日<日>10:00〜13:00■要電話申込、先着20名、送迎あり■申込締切：3月25日<土>■参加費無料■収穫は7月中旬を予定しています。植え付けのみの参加も可能です。その場合の収穫物は割払いでの送付になります。

ワークショップ3：「ペットボトルで水耕栽培」
期間中会場内で、随時ペットボトルを加工して、手軽に水耕栽培のキットを作ることができます。ハーブなどの種とともに持ち帰り、家庭で栽培できます。（参加費無料・申込不要）

Cafe & Sweets:
セルフサービスのお茶とお菓子をご用意しています。（無料）

Books:推薦図書館
本のコーナーです。

室内にお戻りの際には展覧会チケットをご提示ください。

Open Cafe:晴れた日にはこちらでもお茶をお飲みいただけます。

「楽書掲示板」コーナー

トイレ

Drawing: 岩堀 敏行
Music: DJ Yummy

ギャラリー展示室→

高校生ウィーク2006「ちへい／cafe」

会場のご案内
2006年3月15日〈火〉→4月16日〈日〉
Open15：00　Closed18：00

どなたでもご利用いただけるセルフサービスのカフェです。展覧会鑑賞の合間におくつろぎください。

高校生ウィーク2006の情報は下記URLでもご覧いただけます。
水戸芸術館URL：http://www.arttowermito.or.jp/atm-j.html

図1：カフェ「ちへい/cafe」会場全体図（フィールドにおいて配布されていた資料より）

なるようなデザインがなされている[2)]。また実際に，カフェの中ではこのような「教える者」と「教えられる者」とが反転する様子が観察された。例えば，ワークショップ「ペットボトルで水耕栽培」コーナーにおいては，何度もスタッフを経験した熟練スタッフであるＣ農業高校[3)]の生徒が，初めてスタッフとして参加したＣ農業高校の生徒に加工方法や栽培の方法を教えるためにペットボトル工作を行うよう指示する場面や，以前客として参加した人々がスタッフの不在時に他の来場者にペットボトル工作の方法を教えるという場面が生じていた。また，来場者がコーナーに設置してある裁縫道具や布などを用いて自由に裁縫を行うことのできる「日々の針仕事」コーナーでは，裁縫に熟達した過去の高校生ウィークの参加者や一般来場者が，自分の作業の傍ら，他の来場者に裁縫を教えるという場面が生じていた。

本研究が分析対象とする交流ノート「楽書掲示板」での相互行為は，このようなカフェ全体の文化，すなわち「教える者」と「教えられる者」とが柔軟に反転することのできる文化の中で営まれたものである。

4）交流ノート「楽書掲示板」

交流ノート「楽書掲示板」は，2003年の「高校生ウィーク」において企画・実施されたプログラム「楽書事始」から構想を得て，調査者（石田）が企画・実施したプログラムである。具体的には，カフェ「ちへい/cafe」にある机の一つを「楽書掲示板」コーナーとし，その机の上に「楽書掲示板」と題されたＡ４大版のスケッチブックを設置した。また，机の上にはスケッチブックの他，スケッチブックに書き込みを行うための色鉛筆が設置され，来場者は自由にそれを使うことができた。机の前には，通常，小さな木製のイスが二つおいてあり，来場者は通常，１人から２人でこのコーナーを利用していた（図２・３）。

交流ノート「楽書掲示板」に関する説明と調査に関する説明は，スケッチブックの表紙と表紙裏の部分に「楽書掲示板」に関する説明書を付すとともに，机の上にも「楽書掲示板」の説明書を付した透明のボードを設置することで対応した。なお，説明書には，「ドローイング，イラスト，コトバ…など，表現の手段はなんでもかまいません。わたし自身の「いま」，「人間の未来へ」ダークサイドからの逃走」展をご覧になった「いま」。カフェ「ちへい/cafe」に参加する「いま」。Bookコーナーの本に触れた「いま」。そして，楽書掲示板に書き込まれた誰かの痕跡に触れた「いま」…などなど。さまざまな「いま」の形を，また一つの痕跡として，ノートに残していってください。」という文章とともに，「楽書掲示板」が本研究の調査の一環として設置されていることの説明を記した。

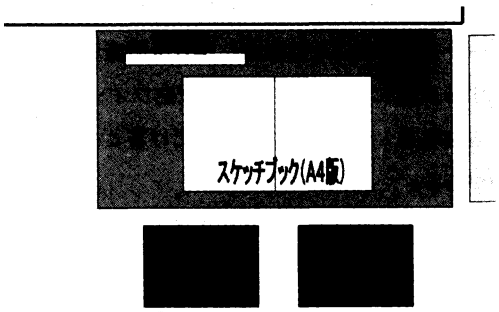


図２：「楽書掲示板」コーナー全体図

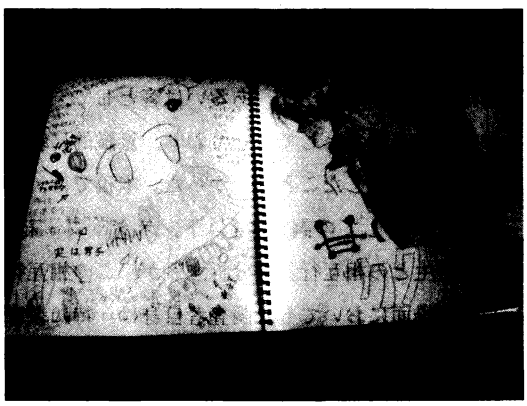


図３：交流ノート「楽書掲示板」

2.3　調査者

調査者（石田）は「高校生ウィーク2006」に，１週間に２日から３日，カフェ「ちへい/cafe」のカフェ・スタッフとして参加した。その他にも客として来場した日

を含めると，1週間につき3日，合計15日間フィールドワークを行ったことになる。また，調査者は今回の参加をする以前に，2005年の「高校生ウィーク」のカフェ「自由喫茶・自由工作」に1日だけ客として来場した経験がある。

カフェ・スタッフの仕事は，カフェ開場前のセッティング，カフェ閉場後の片づけ，そして，飲み物を提供するためのグラス等の準備や来場者への案内などがある。調査者はカフェ・スタッフとして参加する日には，これらカフェ・スタッフの仕事を行いながら，カフェ全体やワークショップ・コーナーの参与観察を行った。また，調査者はカフェ・スタッフ，あるいは客として，その他のスタッフや来場者として接しており，意識的に教育的な援助を行おうとしたことはなかった。本稿では，カフェ・スタッフとしての調査者(以下，スタッフ・石田)とある小学生との相互行為を分析するが，この相互行為が行われた場面においても，調査者自身は，特に教育的な援助をしようと考えてはいなかった。本稿で分析する事例において，「じゃあ，続き描かなきゃね。」(事例3)や「じゃあ，表紙かかなきゃね。」「タイトル書かなきゃね。」(事例5)といった調査者の発言が見られるが，これらについても明確に教育的な援助を意識して発言されたものではない。このとき，調査者は，「少女マンガ」の「読者」であり，かつ，自分自身で「少女マンガ」の作品やイラストを描いていた経験がある者(後述)として，そこに描かれているイラストを「少女マンガ」の作品として完成させたいと考えていた。そして，そのために必要な情報や作業をかおるに要求するため上述のような発言を行っていた。

調査者がカフェ「ちへい/cafe」の調査を目的としてカフェに参加していることはスタッフ全員に告知していた。しかし，調査者は他のスタッフから「石田さん」(スタッフ同士での一般的な呼び方)，あるいは「姉さん」「姉御」などと呼ばれており，「調査者」というよりもむしろ「少し年の離れたカフェ・スタッフの一員」として認識されていた。

今回の分析に関わって，もう一つ重要なことは，調査者，すなわちスタッフ・石田が，「少女マンガ」の「読者」であり，かつ，以前自分自身でも「少女マンガ」の作品やイラストを描いていた経験があるということである。スタッフ・石田は，小学生の時分から「少女マンガ」に没頭し，中学生になると友人とともに「交換マンガ」という形で「少女マンガ」作品の創作を行っていた。さらに中学2年以降は自作のイラスト等を掲載する同人誌を友人とともに発行していた。また，好きなマンガ・アニメを共有する文通相手とともに，自作のイラストを交換し合っていた。そのため，スタッフ・石田にはすでに「少女マンガ」というジャンルに対する知識・技術が備わっていたといえる。

2.4 調査協力者：水野かおる(仮名)

本研究の分析の焦点となる水野かおる(仮名)(以下，かおる)は，小学6年生(2006年3月時点では5年生)の女児である。かおるは2006年3月18日に初めてカフェに来場して以来，複数回カフェへと来場し，スタッフからも「常連」として認識されていた。

かおるは3月18日に，友人と見られる他の女児2名とともに「日々の針仕事」コーナー(裁縫を自由に行うことのできるワークショップ・コーナー)で過ごした。このとき，かおるは他の女児とともに，過去の「高校生ウィーク」参加者の女性に，自分の作りたいものを作る方法などについて教わり，彼女のアドバイスの下で裁縫を行うという経験をしていた。その後，友人の女児とともに「日々の針仕事」コーナーで時間を過ごすことが多かったが，4月6日に友人の女児がかおるよりも先に帰宅してしまったことをきっかけに，「日々の針仕事」以外のコーナーにも関心を示すようになり，カフェ・スタッフや他の来場者との交流を積極的に行うようになった。

本研究が分析対象とする4月8日における相互行為は，このような中，かおるが「楽書掲示板」コーナーに関心を示し，スタッフ・石田との交流に積極的な姿勢を見せることで生じたものである。この相互行為の中で制

作されたイラストを図4・5に示した。図4・5のイラストのうち，図4は，かおるによって描かれたものであり，図5はスタッフ・石田によって描かれたものである。

この相互行為の後，かおるは自分自身が家や学校での生活の中で描きためたイラストを，カフェに来場していたC農業高校の美術教師に見せに行く。さらに，4月9日には，『恋する林護(りんご)』というタイトルのみが記されたA5版の小冊子(A4版のコピー用紙の束を半分に切り，束にして左端を3箇所ホチキス止めしたもの)(図6)を作成し，スタッフ・石田に見せる。その後，かおるは「楽書掲示板」コーナーに小冊子『恋する林護』を置いて，「ペットボトルで水耕栽培」コーナーで工作を行うようになり，4月15日には，何日もペットボトル工作に関わってきた者として，ペットボトル工作を行った経験のないカフェ・スタッフに，工作の方法を教えるという姿も見られた。このように，水野かおるは，カフェ全体の参加過程の中で，「教えられる者」から「教える者」へと，立ち位置を移行させてきたことがわかる。

かおると「少女マンガ」の関わりの詳細については，インタビューなどで明確な情報を得ることはできなかった。しかし，かおるは小冊子『恋する林護』を作成する際，『りぼん』や『ちゃお』[4]を参考にしたと自分自身で述べており，また，スタッフ・石田との相互行為の中でも具体的な「少女マンガ」作品の名称を述べている。このことから，かおる自身も「少女マンガ」の「読者」であることがわかる。また，かおるは自分自身で描いた女の子や洋服のイラストを描きためたファンシー・ノートを持っており，「少女マンガ」のイラストを描くことについても関心があったと考えられる。

図4：イラスト『甘いカクザトウ』(水野かおる)

図5：イラスト『甘いカクザトウ』(スタッフ・石田)

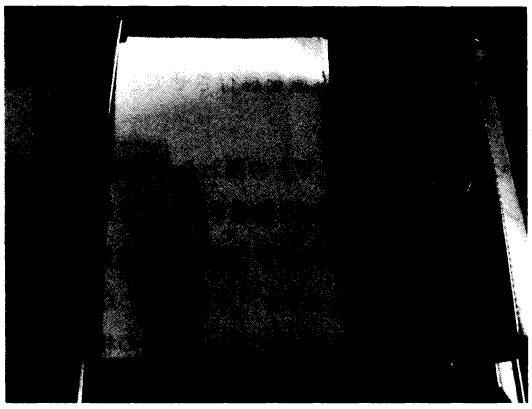


図6：冊子『恋する林護』

2.5 分析方法・記述方法

本稿では，カフェ「ちへい/cafe」に設置された交流ノート「楽書掲示板」をめぐる，スタッフ・石田と水野かおるとの相互行為を分析する。分析にあたっては，エスノグラフィーに特徴的な分析的機能法（例えば，エマーソン・フレッツ & ショウ, 1998）を用いた。具体的には，水野かおるとスタッフとの相互行為が行われた2006年4月8日のフィールド・ノートを中心として，①フィールド・ノートを一組のデータ・セットとして検討し，②フィールド・ノートを1行ずつ検討し，それぞれについてコーディングを行った（「オープンなコーディング」）。次に，③調査課題に基づいて「焦点をしぼったコーディング」を行い，スタッフ・石田と水野かおるとの間で行われた相互行為の展開についてのパターンを発見した。このパターンに基づいて，交流ノート「楽書掲示板」で行われた「読者」から「作者」への移行についての仮説を立て，この仮説を裏付ける具体的な記述をフィールド・ノートから引用する形で解説した。

なお，エスノグラフィーの記述方法についてはさまざまな立場が存在するが，本稿では，リフレクシブ・エスノグラフィー（reflexive ethnography）（Hertz, 1997）の立場に基づいた記述方法を採用する。リフレクシブ・エスノグラフィーとは，「文化を書く」という作業にまとわりついていた「疑似科学性」を問題視し，調査者自身のフィールドでの経験や立ち位置を積極的に解釈し，それらを記述の前面に出すかたちで記述を行うエスノグラフィーの方法論である。

従来，エスノグラフィーの手法によって行われてきた調査研究は，フィールドの中に存在する調査者を透明化してきた。調査者は，フィールドで生じる現象を「神の視点」から眺める特権的な立場を与えられ，その立場から客観的な記述，すなわち「疑似科学的」な記述を行うことを求められてきた。しかしこのような記述はフィールドに調査者が存在しているという事実を隠蔽し，現象を切りとる「フィールドワークの道具」（the key field work tool）としての調査者（Van Maanen et al., 1989）の視点を不明にしてしまう．リフレクシブ・エスノグラフィーはこのような従来のエスノグラフィーを問題視し，調査者によっていかに現象が切りとられ，調査者がフィールドにおいてどのような解釈をしたのかを積極的に記述していく。このように，リフレクシブ・エスノグラフィーの記述方法を採用することは，調査者自身がフィールドで行った解釈そのものも分析の対象となることを意味する。そのため本稿では，「事例」として報告されるようなデータそのものも調査者の視点から切りとられたデータをできる限りそのままのかたちで引用し，「疑似科学的」な視点による書き換えは行わない。

本稿では，このような記述方法を採用することによって，水野かおるを見つめる調査者自身の視点との関わりの中で見いだされていく，水野かおるの変容を記述していく。本山（2004）が明らかにしているように，子どもの発達や変容といった現象はその子ども自身に関わる人々の視点による意味づけや解釈の中で生じる現象である。このような現象を記述するためには，その子ども自身に関わる人々の一人として調査者を捉え，調査者自身の視点から見いだされ，意味づけられていく変容に焦点を当てることが必要である。そのため本稿では，リフレクシブ・エスノグラフィーの立場で記述を行う。

3．交流ノート「楽書掲示板」における「作者」への移行過程

3.1「らくがき」から「作品」へ：既存のジャンルの適用によるカテゴリー化

4月8日の時点で，交流ノート「楽書掲示板」はさまざまな用いられ方をしていた。例えば，展覧会やカフェ「ちへい/cafe」の感想を記し，あるいは，スタッフに対するメッセージを記すための「掲示板」として利用されることもあった。また，仲間同士で自分の好きなイラストや言葉を記す「らくがき」の場として利用されることもあった。しかし，本研究で特に注目するのは，それ以外の利用方法，すなわち，自分自身にとって価値のある「作品」を生成する場として交流ノート「楽書掲示板」を利用するような利用方法である。

なお，本稿において「らくがき」とは，固有名性を持たず，「匿名の誰かによって描かれたもの」としての意味しか持たない状態のイラストや言葉などを示す。それに対し，「作品」とは，「らくがき」に意味が付与された状態である。本稿では特に，特定のジャンル（本稿では「少女マンガ」というジャンル）が持ち込まれ，そのジャンルの中で一定の価値や意味を持つものとして意味が付与された「らくがき」を「作品」と呼ぶ。

かおるは4月8日より以前に，すでに交流ノート「楽書掲示板」を利用し，「女の子」のイラストを描いていた。しかしこの時点において，このイラストは単なる「らくがき」として周囲の人々に意味づけられていた。カフェ「ちへい/cafe」の来場者もカフェ・スタッフもそのイラストに特別な意味を見出すことはなく，交流ノート「楽書掲示板」にある他のイラストや言葉などと同様，カフェ「ちへい/cafe」に来場した匿名の誰かによって描かれたもの，すなわち「らくがき」として認識していた。交流ノート「楽書掲示板」には，それ以前にさまざまなイラストや言葉などが描かれていたが，それらの技術的なレベルはさまざまであった。匿名の誰かによって描かれた一過性の「らくがき」であるにも関わらず，高いレベルの技術が施されたイラストも複数存在していた。そのような中，「楽書掲示板」に記されたイラストを，単なる「らくがき」ではなく価値ある「作品」として意味づけるためには，書き手であるかおるとかおるをとりまく他者との相互行為の中でそこで生成されるイラストを価値ある「作品」として達成することが必要である[5]。以下，このような過程，すなわち，かおるによって生成されたイラストが「作品」として達成される過程を明らかにする。

以下の事例（事例1）はかおるがみずえ（小学校低学年くらいの年代と見られる女児），ゆうた（就学前と見られる男児）とともにカフェに来場したあと，かおるが「楽書掲示板」コーナーへと向かい，交流ノート「楽書掲示板」にイラストを描くまでの過程である。

【事例1：「制作する意志」の達成】

16：50頃．それまでキッチンカウンター前の4人がけテーブルにいたかおる・みずえ・ゆうたのうち，かおるだけが「楽書掲示板」コーナーへ来る。かおるはスケッチブックに描かれた絵のうち，最近のもの3ページくらい（おそらくかおるかかおるの友達が描いたもの）を見る。その後，もっとも最後に描かれた女の子のイラストのページを開き，イスに座って，そのページに色鉛筆で一人でなにかを描きはじめる。かおるが「楽書掲示板」ノートに描きはじめて1分ほどすると，キッチンカウンター前の四人がけテーブルにいたみずえ・ゆうたも「楽書掲示板」コーナーへと来る。そして，コーナーにあった，残り二つのイスを引き出し，座りながら，かおるが描いている様子を眺める（後ろから見ると左からみずえ・かおる・ゆうたの順に並んでいる）。かおるは，みずえ・ゆうたに対応せず，そのまま女の子のイラストを描きつづける。みずえ・ゆうたはそのまましばらく，かおるがイラストを描く様子を見ているが，1分ほどすると，その場から離れ，かおるだけが「楽書掲示板」コーナーで絵を描いている。

（2006年4月8日，フィールド・ノート，144-154[6]）

事例1において，かおるは，以前カフェに来場した際に書いた「女の子のイラスト」(下線部)に再び向き合い，そこに付け足す形でイラストを描きはじめる。そして，「仲間」としての関係を持ち込もうとする他者(みずえ・ゆうた)に対する対応を行わず，イラストを描く作業を継続する。これらの出来事が生じることによって，かおる自身と他者(みずえ・ゆうた)との関わりの中で，かおるの「制作する意志」が見いだされていく。みずえ・ゆうたは当初，一緒にカフェに来場し，場を共有していた「仲間」としての関係性を持ち込もうとして，三人並ぶ形で交流ノート「楽書掲示板」を見る。しかし，かおるはみずえ・ゆうたに「仲間」として対応せず，一人で継続して作業を続ける。その結果，みずえ・ゆうたは「仲間」としての対応を行わないかおるから離れ，別の場所へと移動する(波線部)。このときかおるは，カフェに来場した「仲間」ではなく，前日から描いていたイラストを継続して制作しようとする者，すなわち「制作する意志」を持つ者となる。つまり，かおるの「制作する意志」が他者(みずえ・ゆうた)との相互行為の中で達成される。

また，事例1につづく事例2ではさらに，かおるによって描かれたイラストが「少女マンガ」というジャンルとしてカテゴリー化される。

【事例2：スタッフ・石田によるカテゴリー化とかおるによる承認】

キッチンコーナーにいた石田，「楽書掲示板」コーナーに来て，かおるの横にたち，「楽書掲示板」ノートに描かれているものを見る。すると，昨日までに描かれた女の子のイラストの下に小さな顔の絵が二つ描かれている。[1]どちらのイラストも少女マンガ特有の大きな目をしている。また片方のイラストは輪郭がなく，黄色の前髪と目・鼻・口だけが描かれている。また，イラストの下には「悪ま」という文字が記されている。もう一つのイラストは頭蓋骨のような輪郭の中に髪の毛と目・鼻・口が描かれており，イラストの下に「ホネ個」と文字が記されている。[2]石田，それを見てかおるに，「これ，なに？」と尋ねると，かおるは「女の子。人間。」と答え，そのページの上に黒系の色鉛筆で「これは人間です」と書き始める。[3]石田，笑って「これは人間です…って，せめて「女の子」ってかこうよ，「女の子」って(笑)」と言うと，[1]かおるも笑う。[2]そして，「これは女の子なんだけどー，ホントは男の子なの。」と言う。

(2006年4月8日，フィールド・ノート，155-165)

事例1で示した一連の過程を見ていたスタッフ・石田は，かおるによって描かれるイラストを，「少女マンガ」としてカテゴリー化する(二重線部1)。スタッフ・石田によって書かれたフィールド・ノートにおける「どちらのイラストも少女マンガ特有の大きな目をしている」という記述は，かおるによって描かれたイラストをスタッフ・石田が「少女マンガ」としてカテゴリー化していることを示している。これは，スタッフ・石田自身が「少女マンガ」の「読者」であったことと関連する(2.3参照)。さらにかおるが，石田の「これ，なに？」という質問に対し，「女の子。人間。」と答えたことによって，「少女マンガ」というカテゴリーの妥当性がより強化される(二重線部2)。そのためスタッフ・石田は，「これは人間です」という説明を書こうとするかおるに対し，「「女の子」ってかこうよ」と指摘する(二重線部3)。すなわち，ここでスタッフ・石田は，「これは人間です」という説明が，「少女マンガ」というカテゴリーから逸脱したものであることを示すことで，より積極的な形で「少女マンガ」というカテゴリーをかおるに提示する。このような石田の積極的なカテゴリー提示に対し，かおるも笑いで応答することで，このカテゴリーを承認したことを示す(下線部1)。さらに，かおるが，「これは女の子なんだけどー。ホントは男の子なの。」と「少女マンガ」の語り口を利用した物語を語り出す(下線部2)ことで，かおるによって描かれたイラストが「少女マンガ」として意味づけられる。

3.2　パスティッシュ化による物語の生成

スタッフ・石田とかおるとの相互行為の中で，かおるによって描かれたイラストが「少女マンガ」として意味づけられると，かおるは「少女マンガ」というジャンルを利用しながら，自分自身の物語を生成し始める（事例3）。この利用の仕方は，ジャンルに対する自分自身の位置を確保した上でジャンルを利用する「パロディ」(parody) とは異なる。むしろ，ここでのジャンルの利用の仕方は，書き手が自分自身の明確な位置を持たず，既存のジャンルを模倣する中で自分自身の位置を見いだしていくことに特徴がある。すなわち，これは既存のジャンルのパスティッシュ (pastiche) 化による物語の生成ということができる[7]。

【事例3：パスティッシュ化による物語の生成】

石田，笑って「これは人間です…って，せめて「女の子」ってかこうよ，「女の子」って（笑）」と言うと，かおるも笑う。そして，「これは女の子なんだけどー，ホントは男の子なの。」と言う。石田それを聞いて，「え。ホントは男の子なのに，女の子なの？」と聞き返すと，かおるはそうだと答え，「人間界では女の子になってなきゃいけないの。」と説明する。石田が「どうして？」と聞くと，かおるは「一族のしきたりで。」と答える。石田，「あー。なるほど。」と納得すると，かおるはさらに，女の子のイラストの下に描かれた下の顔のイラストについても説明し始める。かおるは，輪郭のない黄色の前髪と目・鼻・口が描かれたイラストは「悪魔」なのだと説明し，また，この「悪魔」は女の子になった男の子（一番大きく描かれた女の子のイラスト）のことを好きになってしまったのだと説明した。かおるは [1]「悪魔は女の子にばけたこの子のことを好きになっちゃったの。さあ大変。これからどうなる！」と言って，石田を見て親指をたててポーズをとる。[2]石田「これからどうなる！」と繰り返し，「そうかー。じゃあ，続き描かなきゃね。」と言って，かおるの隣のイスに座り，かおるが描いているとなりのページに，かおると同じデザインの女の子のイラストを描き始める。

（2006年4月8日，フィールド・ノート，163-176）

下線部を施した部分でかおるによって語られる物語は，すべて「少女マンガ」というジャンルに特有の語り口を利用して生成されている。「人間界」「一族」「しきたり」「悪魔」といった用語，そして，「女の子なんだけど，ホントは男の子」「女の子になった男の子を好きになってしまった」といった，主人公を中心とした人間関係を中心に語る用語法は，「少女マンガ」というジャンル特有の語り口を構成する構成要素である。これらの語り口を利用することによって，かおるは自分の描いたイラストにまつわる物語を生成していく。

このように，ここで語られる物語は，「少女マンガ」というジャンルのパスティッシュ化によって生成されている。そのため，「少女マンガ」というジャンルの模倣的要素が多く，かおる自身によって生成された部分は明確でない．しかしこのようにパスティッシュ化によって物語が語られることは二つの重要な意味があると考えられる。

一つ目は，「少女マンガ」というジャンルのパスティッシュ化によって物語が語られることで，物語を他者と共有するための基盤ができあがることである。事例3では，「少女マンガ」というジャンルに関わる知識に基づいて，スタッフ・石田とかおるとの相互行為が展開している。さらにかおるはイラストに関わる一連の説明を終えたあと，「さあ大変．これからどうなる！」（波線部1）という連載漫画特有の言い回しを用いることで，自分自身の展開した物語をスタッフ・石田に引き渡す．スタッフ・石田も「これから，どうなる！」と繰り返すことによって，それらを引き受けたことをかおるに示し，実際に「続き描かなきゃね」と言って，かおるによって受け渡された物語を展開しようとする（波線部2）。このような他者への物語の引き渡しは，かおるによって展開された物語が，「少女マンガ」という特定のジャンルに基づくことで可能になる。

二つ目は，パスティッシュ化に伴う文脈の移動によって，そこで語られる物語が「かおる自身の物語」として意味づけられる点である。事例3においてかおるが語る物語は「少女マンガ」というジャンル特有の物語である。しかし，このような物語が，「少女マンガ」の通常の文脈とは異なる別の文脈の中で，かおる自身に語り直されることによって，その物語はかおる自身の物語として意味づけられる。実際，スタッフ・石田はかおるによって語られる物語の内容を「少女マンガ」というジャンルの知識から理解しようとはしない。そうではなく，かおるに「どうして？」など物語の内容に関わる質問を行い，かおる自身の説明の中で理解しようとしている（二重線部)。このような過程，すなわちかおるによって語られる物語をかおるに帰属させようとする一連の相互行為の過程の中で，物語は「かおる自身の物語」として意味づけられる。

つまり，既存のジャンルのパスティッシュ化により物語が生成されることによって，一方で①他者と物語を共有するための基盤が形成され，またもう一方で，②物語の「作者」としての基盤が形成される。以下では，特に，②の基盤が展開される中で，かおるが相互行為における自身の立ち位置を「作者」へと移行させるまでの過程を中心に検討する。

3.3 「わたしの現実」の保護

以下の事例(事例4)は事例3の直後，ゆうたが「楽書掲示板」コーナーへと来ることで，それまでに形成されていたスタッフ・石田とかおるとの関係性が一旦崩壊する場面である。このような関係性の崩壊の中で，それまでに構築されてきた「少女マンガ」という「現実」(現実1)に対し，別の「現実」(現実2)が持ち込まれる。このような「現実2」の登場とそれによる「現実1」の危機に対し，かおるは自分自身の「現実」である「現実1」を守るため，さまざまな抵抗を試みる。

以下，事例4では，かおるによって「現実1」の保護が試みられる部分に下線を施し，ゆうたによって「現実2」が持ち込まれる部分に波線を施した。

【事例4：「わたしの現実」の保護】

石田が描きはじめて2分ほどした頃(16:55)，石田の右横にゆうたが来る。ゆうたは石田がイラストを描いている様子をみると，「なに，かいてんのー？」と石田に尋ねる。そこで石田，「女の子。」と答えると [1]ゆうたは石田の左側にあったもう一つのイスにのぼってきて座り，緑の色鉛筆を手にもって「おねえちゃんは，こんな，かみがた。」と言って，石田の描いたイラストの上から波線のようなものをかこうとする。ゆうたが石田のイラストの上から何かを描こうとしているのを見るやいなや，[2]かおるは「ダメ！きれいにかいてるんだから！」と言ってゆうたを両手でつかまえ，「これにしな！」と言ってテーブルの上においてあったA6サイズのポストイットをゆうたの前に置く。[3]ゆうたが「やだー」と言うと，[3]かおるは「これ。これなら大丈夫だから。」と言ってポストイットを2回手でたたく。しかし[4]ゆうたがやはり「やだー。」と言うので，石田，「いいよ，いいよ。こんなのいくつだって描けるんだから。」と言って笑うと，かおるはあきらめて自分がそれまで描いていたページに再び向き合い，何か文字を書き始める。[5]ゆうたは緑色の色鉛筆で石田が描いた女の子のイラストの髪の毛の部分に緑色の色鉛筆で波線のようなものを描く。石田，それを見て，いったんその場を離れて，キッチンコーナーへと戻る。

3分ほど，かおる・ゆうたは別々のページに別々のものを描いているが，その後，ゆうたが「楽書掲示板」コーナーを離れると，[4]かおるはそれまでゆうたが波線のようなものを描いていたページ(初めに石田がイラストを描いていたページ)を開き，ピンクの色鉛筆をとって，石田の描いたイラストの上から何かを描く。1分ほど，そのページに何かを描くと，再びかおるがそれまで描いていたページに戻り，色鉛筆で文字を書く。

(2006年4月8日，フィールド・ノート，177-195)

事例4において，ゆうたはスタッフ・石田の描いているイラストに対し，実在の人物(「おねえちゃん」)を重ね合わせる(波線部1)。すなわち，ここでゆうたによって持ち込まれている「現実2」は，「少女マンガ」の「作品」としてのイラスト(現実1)ではなく，実在する人物の模写としてのイラストである。このような，ゆうたによる「現実2」の持ち込みに対し，かおるは「ダメ！きれいにかいてるんだから！」と抵抗を示す(下線部2)。またこのようなかおるの抵抗に対し，ゆうたも抵抗を示し，これが繰り返されることで「現実1」と「現実2」との衝突が生じる(波線部3・4，下線部3)。このような状況の中で，それまでかおるとともに「現実1」を構築してきたスタッフ・石田が「現実1」を放棄することで，かおるも「現実1」を保護することをあきらめ(二重線部)，一旦，ゆうたによる「現実2」の持ち込みを許容する(波線部5)。しかし，「現実2」を持ちこんだ主体であるゆうたが「楽書掲示板」コーナーから去ると，かおるはすぐに，持ちこまれた「現実2」を打ち消し，再び「現実1」を復帰させるべく，自分自身でスタッフ・石田のそれまで描いたイラストに付け足す形でイラストを描き始める(下線部4)。

ここで重要な点は，かおる自身が自分自身の描いたイラストではなく，スタッフ・石田によって描かれたイラストを保護しようとした点にある。本来，かおるにとって，スタッフ・石田のイラストは，他者が描いたイラストに過ぎない。それにも関わらず，かおるがスタッフ・石田のイラストを保護しようとしたのは，スタッフ・石田のイラストが「少女マンガ」の「作品」であり，かつ，かおる自身によって生成された物語の「作品」だからである。すなわち，かおるが保護しようとしたのは，「少女マンガ」としての自分自身の「作品」であると考えられる。

このように，事例4では，他者(ゆうた)から持ちこまれた「現実2」への抵抗という形で，かおるの「作者」への移行の萌芽を見いだすことができる。

3.4 「作者」としての権威の獲得

「作者」への移行が決定的なものとなるのは，それまでかおるとともに物語を共有してきたスタッフ・石田が，かおるの「作者」としての権威を承認し，また，かおる自身も「作者」としての権威を承認したときである。以下，このような「作者」としての権威が構築される過程を検討する。

事例4のあと，再び，スタッフ・石田とかおるとの間で事例2のような相互行為が展開し，再びかおるによる物語が生成されていく。このような相互行為の中でスタッフ・石田は，かおるよりも「少女マンガ」というジャンルに関する知識や技術を豊富に持っていることから，かおるの「助言者」として相互行為に参加する。かおるは，スタッフ・石田の助言や支援を受けて物語を生成しようとする者ではあるが，この時点ではまだ，物語に対する明確な所有意識は生じておらず，スタッフ・石田によって描かれたイラストは，スタッフ・石田のものであると認識されている。しかし以下に紹介する事例5では，スタッフ・石田がタイトルに書くべき漢字を間違えるという出来事(破線部)が生じることによって，このようなスタッフ・石田とかおるとの関係に変化が生じる。

【事例5：「作者」としての権威の獲得】

それからさらに10分程度すると，再びかおるがキッチンコーナーにいる石田に「できたよー。」と声をかける。石田が「なにができたの？」と聞くと，かおるは「タイトル。」と答える。そこで，石田，キッチンコーナーから出て，「楽書掲示板」コーナーへと向かい，「楽書掲示板」コーナーのイスに座る。石田，かおるが書いていたページに新しく書かれた部分を発見することができなかったので「タイトル，なに？」とかおるに聞くと，かおるは「甘い角砂糖.」と答える。石田，「甘い角砂糖」という文字を探すが見あたらないので「タイトル，書かなきゃ。」とかおるに言うと，かおるは石田に「あるじゃん。」と言って，そのページの左上隅を指さす。石田その部分を見ると，そこには「タイトル　甘いかくざと

う」と書かれている。石田「あー，ごめん。あったあった。甘い角砂糖。」と言うと，かおるはうなづく。[1]石田，「じゃあ，表紙かかなきゃね。」と言って，隣のページを見る。

石田，隣のページを見て，自分がすでに描いたイラストのつづきを描こうとする。石田は輪郭と顔，そして前髪の部分しか描いていなかったのだが，髪型などがかおるによって付け足されて描かれている。（おそらく，17：10頃，かおるによって描かれたと考えられる）かおるは，女の子のイラストの髪の部分を指さして「髪。これ。」と石田に言う。[2]石田，「あ，かいてくれたんだ。」と言って，薄紫色の色鉛筆を手にとり，[3]「タイトル書かなきゃね。」と言って，そのページの下３分の１のスペースに色えんぴつでポップな形式の文字をかきはじめる。かおるは「甘い角砂糖ね。甘い角砂糖。」と言う。石田，薄紫の色鉛筆で「甘」という文字を書こうとするが，横棒を一本抜かした文字をかいてしまう。するとかおるは，横棒が一本足りないということを石田に指摘する。石田，「え。」と言い，「こういうときは携帯だよ。携帯。」と言って携帯電話を取り出し，メール作成機能で，「甘い」とうって，「甘」という漢字を確かめる。すると確かに横棒が一本足りないことが判明する。石田「本当だ。一本足りないね。」とかおるに言うと，かおるは「マンガにかいてあったことなんだけどー，そういうふうに携帯電話で調べるのって負け犬らしいよ。」と言ってため息をつく。石田，笑って「いいの。負け犬だから，負け犬で。」と応える。

石田，「甘い」の部分の文字を書き終えると[1]かおるが「角砂糖はちゃんとかいてね。」と言う。[4]石田，かおるに「『角砂糖』はどうするの？」と聞くと，かおるが「え？」と聞き返したので，[5]石田「『角砂糖』はひらがな？カタカナ？」と再度質問する。すると，かおるは「うーん…」と言って２秒ほど考え，「カタカナ。」と答える。石田，「カタカナね。」と言って，中抜きのゴシック体で「カクザトウ」という文字を書く。

タイトル文字を書き終え，石田が再び女の子のイラストの色ぬりをはじめると，[2]かおるが「悪魔が出てくるんだよね。」と言って，自分が描いたページの小さな顔のイラストを指さす。[6]石田，「そうか。」と言い，「悪魔，どんなの？」と言ってかおるのかいたページの「悪魔」のイラストを見る。すると[3]かおるは「悪魔は男でー，髪の毛は黄色。金髪だから黄色。」と言う。

（2006年4月8日，フィールド・ノート，230-265）

ここで注目すべきは，スタッフ・石田が漢字を間違えるという出来事（破線部）前後における石田の発言（二重線部）とかおるの発言（下線部）の変化である。出来事が生じる以前，スタッフ・石田は，イラストを制作する主体として自分自身を位置づけるような発言をしている。特に，「あ，かいてくれたんだ。」（二重線部２）という発言では，自分自身の作品制作を手伝う者としてかおるを位置づけており，自分自身がイラスト制作の主体であることが示されている。このことは，この時点でまだスタッフ・石田が自身の描いたイラストの所有権を自分自身に付与していたことを示している。

しかし，出来事の後になるとこのような関係性は一変する。スタッフ・石田はイラストを制作する方針についてかおるに尋ね，かおるの意向を確認してから，イラストを制作するようになり（二重線部４～６），また，かおる自身も積極的にイラスト制作の方針を示すようになる（下線部１～３）。すなわち，スタッフ・石田は自分自身の描いたイラストの所有権を放棄し，かおるという「作者」の意向を受けてイラストを制作する「イラスト制作担当」となる。また，かおる自身も制作されるイラストを，「自分自身の物語を表現するもの」として意味づけ，その物語を創作する「作者」として振舞う。このように，スタッフ・石田とかおるの関係性の変容によって，二人の間で制作されるイラストは，スタッフ・石田個人による「作品」ではなく，かおるによって生成された物語を表現した「作品」として意味づけられ，かおるは自らを「作者」として意味づける。

4．考　察

以上の分析から明らかになったかおるの参加過程の移行を，「読者」から「作者」への移行という観点からまとめると以下のようになる。まず「少女マンガ」の「読者」であるスタッフ・石田によって，かおるは「少女マンガ」というジャンルの「読者」として見いだされる。また，かおる自身も「少女マンガ」の「読者」であることを承認することによって，スタッフ・石田とかおるとの間に，「少女マンガ」というジャンルを共有する「読者」のコミュニティが生成される。かおるはこのコミュニティにおいて共有された「少女マンガ」というジャンルを模倣し，パスティッシュ化することによって自身の物語を生成する。これらのことは，かおるによって生成された物語はスタッフ・石田にとっても理解可能なものとなり，スタッフ・石田にも物語が共有される。しかしこの時点では，まだ，かおるは「作者」ではない。かおるが「作者」へと移行するのは，他ならぬかおる自身が自分の物語を保護しなければならないという局面に直面するときである。本研究においてそのような局面は二つ存在していた。一つは，スタッフ・石田とかおるによって構成されるコミュニティにとって第三者的な存在であるゆうたが別の現実を持ちこもうとする局面であり，もう一つは，コミュニティのメンバーであるスタッフ・石田が物語の共同構築に失敗するときである。特に二つ目の局面は，コミュニティそのものの関係の変容をもたらし，その結果，かおるは「作者」へと自分自身の参加形態を移行させた。

以上のことから，「読者」から「作者」の移行においては以下の三つの側面が重要であることが明らかとなった。

(1) 既存のジャンルの利用（パロディ，パスティッシュ）による物語の生成

(2) ジャンルを共有するコミュニティの存在

(3) 自分自身の領域の保護

「読者」から「作者」への移行においては，このように他者へと自分自身を開き，他者とともに物語を生成していくという側面（(1)）と，他者と自分との間に境界を設定し，他ならぬ自分自身の領域を守るという側面（(3)）という，相反する二つの側面が存在している。そして，(2) ジャンルを共有するコミュニティは，このような二つの相反する側面を調整する役割を果たしている。

セルトー（1987）は，大衆的な読みを，「読者」が自分自身の社会的経験を意味づけるために，既存のテクストを解体し，再統合させることによって構築した，文化のブリコラージュ（cultural bricolage）として位置づけている。本研究では，このような「読者」の生産的な側面が初めから単独で存在するのではなく，むしろ，「読者」の生産的な側面は「読者」の受容的な側面と不可分な関係にあることを明らかにした。本研究において分析したように，かおるは，他者の領域である既存のジャンルの中で自分自身の物語を生成し，結果的には，その物語こそが後に保護されるべき自分自身の領域となった。このように，最終的にかおる自身の領域となる一定の領域は，元来，他者の領域であった場所で生成されたものである。

このことは，テクストに関わる創造性あるいは主体性といったものが単独では存在しえず，常に，受動的な側面との関わりの中で構築されていることを示唆している。かおる自身が既存のジャンルのパスティッシュ化によって自身の物語を生成したように，あらゆる物語の生成やテクストの生成は，程度の差こそあれ，既存のものとの受動的な関わりの中で考えられる必要がある。本研究では，このような生産的な側面と受動的な側面との関係を媒介する (2) ジャンルを共有するコミュニティの存在については検討することができなかった。これについては，今後の課題とする。

注

1) 本研究では，メディア・テクストのオーディエンス一般を示す概念として「読者」という語を用いる。また，メディアなど，現代的な生産手段を自らの目的のために用いようとする人々やそのコミュニティを示す概念として「作者」という語を用いる。

2) カフェ的な空間におけるこのような反転可能性については，熊倉(2005)を参照。

3) カフェ「ちへい/cafe」で行われるワークショップ「ペットボトルで水耕栽培」のボランティア・スタッフはほとんどC農業高校の生徒によって構成されていた。C農業高校の生徒たちは，このワークショップ以外にもいくつかのカフェ「ちへい/cafe」に関わるワークショップを担当した。

4)『りぼん』とは集英社によって発行されている月刊の少女マンガ雑誌である。また，『ちゃお』とは小学館によって発行されている月刊の少女マンガ雑誌である。

5)「『作品』として達成する」とは，「らくがき」が，特定の誰かによる意味づけによって「作品」へとその意味を変容させることを意味する。本稿では意味が人々の相互行為によって達成されるとする象徴的相互行為論やエスノメソドロジーの理論的立場から，特定のジャンルにとって価値や意味のある「作品」としての意味は，それをとりまく人々の意味づけの中で「達成される」ものであるとする。

6) 番号はフィールド・ノートにおける行番号を示す。

7)「パロディ」と「パスティッシュ」についてはブルッカー(2003)を参照。

参考文献

ブルッカー，P.(有元健・本橋哲也訳)(2003).『文化理論用語集　カルチュラル・スタディーズ＋』新曜社.

セルトー，M.(山田登世子訳)(1987).『日常的実践のポイエティーク』国文社.

エマーソン，R.，フレッツ，R.，& ショウ，L.(佐藤郁哉・好井裕明・山田富明訳)(1998).『方法としてのフィールドノート』新曜社.

HERTZ, R. (1997). *Reflexivity & voice*. Thousand Oaks, CA: Sage.

樋口雅子・山崎一希(2005). リンクする関係と場～水戸芸術館「高校生ウィーク」. 2005年日本生活教育連盟第57回夏期全国研究集会・中学高校教育分科会発表資料.

JENKINS, H. (1992). *Textual poachers*. New York, NY: Routledge.

熊倉敬聡(2005) ＜カフェ＞を開く　文化実践家. フィルムアート社・プラクティカ・ネットーワーク編『アートという戦場　ソーシャルアート入門』フィルムアート社，pp.130-134.

毛利嘉孝(2003). テレビ・オーディエンス研究の現代的地平. 小林直毅・毛利嘉孝編著『テレビはどう見られてきたのか―テレビ・オーディエンスのいる風景』せりか書房，pp.208-229.

本山方子(2004). 小学3年生の発表活動における発表者の自立過程―「声が小さい」ことの問題化と「その子らしさ」の発見を中心に―. 質的心理学研究，**3**，49-75.

STOREY, J. (2003). *Cultural studies and the study of popular culture*. Scotland, UK: Edinburgh University Press.

VAN MAANEN, J., MAANING, P., & MILLER, M.(1989). Editors' introduction. In J. C. HUNT (Ed.), *Psychoanalytic aspects of fieldwork* (pp.5-6). Newbury Park, CA: Sage.

受付：2006. 11. 16
受理：2007. 5. 24

Shift from 'Audience' to 'Producer': Analysis of Interactive Behavioral Processes Occurring with the 'Rakugaki-Keijiban' Exchange Notebook

ISHIDA, Kimi (University of Tsukuba,
JSPS Research Fellow)

Abstract

As audience to a piece of media text, the individual reader can sometimes create their own story from the text, shifting to the position of producer. How does the shift from audience to producer take place? This article reports on fieldwork conducted at a cafe space created for youth activities. Specifically, this study focuses on the interactive behavioral process that occurred when a girl and the researcher collaborated together to draw a picture in the 'Rakugaki-Keijiban' exchange notebook.

The research location was the Contemporary Art Gallery at the Art Tower Mito. Every year for a period of one month, the Contemporary Art Gallery establishes a cafe space as an artistic program for youth educational activities. The 'Rakugaki-Keijiban' exchange notebook was one of the activities to promote youth exchanges.

The participant was a grade six elementary school girl who is an enthusiastic reader of the 'Ribbon' and 'Ciao' Japanese comics for girls. Together with the researcher, who is also an avid reader of Japanese girl comics, the girl drew pictures of a girl and a boy resembling comic characters. During the interaction with the girl, the researcher had no educational objectives and exerted absolutely no control over the interaction. The researcher took field notes during the interactive behavioral process for later analysis.

The field notes were analyzed according to the reflexive ethnography approach in order to elucidate events emerging within the interactive behavioral process and events accompanying shifts in the girl's position. The results indicate three important aspects in the shift from audience to producer.

(1) Creating one's own story, using an existing genre through, for example, parody and pastiche.

(2) Existence of a community that shares the genre.

(3) Protection of one's own domain.

By drawing on an existing genre and sharing one's own story with another person, we can create a story with the other person. (1) In this way, a community sharing the genre is constructed. (2) However, that alone does not lead to the shift from audience to producer. In order to realize such a shift, it is necessary to protect one's own domain from other people. (3) Thus, the shift from audience to producer is achieved. This study suggests that creativity and passivity are inseparable aspects of the audience.

日本読書学会会則(2005年8月改正)

第1章　名称と事務所

第1条　本会は日本読書学会と称する。

第2条　本会の事務局は会長の元に置く。

第2章　目的と事業

第3条　本会は読書に関する科学的研究を志す者の連携協力によって日本における読書文化の発達ならびに読書指導の進歩を図ることを目的とする。

第4条　本会は前条の目的を達成するために次の事業を行なう。

1．会員の研究促進を目的とする大会の開催。
2．会員の共同研究を目的とする部会の開催。
3．会員の日常の研究・実践活動の情報の収集ならびにその紹介。
4．読書及びその指導に関する内外諸文献の調査ならびにその紹介。
5．内外における関係諸団体との緊密な連絡。
6．会員の研究業績その他を掲載する機関誌の編集。
7．会員が本会の組織運営に関して協議する総会の開催。
8．その他本会の目的を達成するために必要な事業。

第3章　組織と運営

第5条　本会の会員は正会員，名誉会員および賛助会員とする。

正会員は本会の趣旨に賛同して会員となることを申し込み，常任理事会の承認を得，所定の会費を納入したものとする。

名誉会員は本会の運営に功労のあったもの，または本会の事業に財政的援助をしたもので，理事会が推薦したものとする。名誉会員は正会員と同等の権利を有する。

賛助会員は本会の趣旨に賛同して，賛助会費を納入したものとする。

会員であって会員の義務を怠り，または不都合な行為をしたものは除名されることがある。

第6条　会員は本会が営むあらゆる事業に参加することができ，また本会の機関誌その他の出版物について無料配布または優先的配布を受けることができる。

第7条　本会の事業を運営するために次の役員を置く。

1．会　　長　　1　名
2．副 会 長　　1　名
3．常任理事　　若干名
4．理　　事　　若干名
5．監　　事　　2　名

第8条　理事及び監事は，正会員および名誉会員が互選する。

理事長が運営上必要と認めたときは，前記の互選によるもののほか，正会員の内若干名を指名して理事に加えることができる。

第9条　理事は理事会を構成し，本会の事業執行の責任を負う。

第10条　副理事長は理事の互選により選出し，理事長の任期終了とともに次期理事長となる。

理事長は会長として本会を代表する。副理事長は副会長として会長を補佐し，会長事故あるときは，その職務を代行する。

第11条　常任理事は理事が互選する。

理事長が運営上必要と認めたときは，前項の互選によるもののほか，理事の内2名に限り指名して，理事会の承認を経て，常任理事に加えることができる。

常任理事会は理事長，副理事長及び常任理事によって構成する。

常任理事会は理事長の委託をうけ，本会の通常の運営について常時執行の任にあたる。

第12条　監事は，本会の会計を監査する。

第13条　役員の任期は3年とし，4月1日から3年後の3月31日までとする。新役員は，旧役員の任期が最終となる年度内に，選挙によって決定する。

第14条　本会に名誉会長を置くことができる。名誉会長は理事会の推戴による。

第15条　本会の事業を遂行するために事務局に次の職員を置く。

1．事 務 局 長　　1　名
2．事務局幹事　　若干名
3．海外担当幹事　　若干名

事務局職員に関する規程は別に定める。

第16条　本会に支部を置くことができる。支部に関する規程はこれを別に定める。

第4章　会　　計

第17条　本会の経費は会費，賛助会費，寄附金または補助金等によって支弁する。

第18条　会費は当分の間年間9,000円とし，毎年3月末までに次年度の会費を納入すべきものとする。

第19条　本会の会計年度は毎年4月1日より始まり翌年3月31日で終わる。決算報告及び予算案は総会において承認及び審議決定される。

第5章　雑　　則

第20条　本会の会則の改正は総会において審議決定される。

Vol. 50, No. 3 · 4 March, 2007

THE SCIENCE OF READING

Published by **The Japan Reading Association**

President: **ARISAWA**, Shuntaro **President-elect**: **TSUKADA**, Yasuhiko
EDITORS
AKITA, Kiyomi **UCHIDA**, Nobuko **IWANAGA**, Masafumi **OKOUCHI**, Sachiko
OSHIRO, Yoshitake **OGAWA**, Masako **KAI**, Yuichiro **KAMITANI**, Junzaburo
KOUGO, Reiko **TAKAGI**, Masaki **TAKAHASHI**, Noboru **TAKAHASHI**, Hideaki
CYUJO, Kazumitsu **TSUKADA**, Yasuhiko **TERAI**, Masanori **NIKATA,** Kunio
NISHITANI, Kenji **HANAWA**, Kazuaki **MURAI**, Mariko **MORO**, Yuji
YAMAMOTO, Takaharu **YOKOYAMA**, Makiko
JOYCE, Terry (English Editor)

CONTENTS

Original Articles

Insufficient comprehension of the English first person and second person concepts within Japanese students: Native language interference ..... OKADA, Izumi MAGARA, Keiichi 83

Construction of a reader community: Narrative analysis of experience in a media fanzine community ..... ISHIDA, Kimi 94

The effects of base frequency and affix type in the word recognition of Japanese derivational words..... NAKAYAMA, Michiko 105

Shift from 'audience' to 'producer' : Analysis of interactive behavioral processes occurring with the 'Rakugaki-Keijiban' exchange notebook ..... ISHIDA, Kimi 108

THE SCIENCE OF READING is published four times a year (with an occasional combined number) as a service to members of the Japan Reading Association. Membership in the Japan Reading Association is open to anyone interested in reading. Please send all applications for membership and queries to Sachiko Adachi, Faculty of Education and Human Sciences, Niigata University, 8050 Ikarashi 2-no-cho, Niigata-shi, Niigata, 950-2181, Japan. (adachi@ed.niigata-u.ac.jp)

第50巻　第3・4号
〈通巻　第197・198号〉

平成19年3月1日　発行

会員頒布

編　　集　日本読書学会編集委員会
発 行 人　日 本 読 書 学 会
発 行 所　日 本 読 書 学 会
〒 943-8512　新潟県上越市山屋敷町　上越教育大学内
学会ホームページ：http://wwwsoc.nii.ac.jp/reading/

印刷・前田印刷株式会社

平成十九年三月一日発行（年四回発行）